

放牧酪農における新規参入者支援における 自主的グループの意義

北海道大学大学院 農学研究院：小林 国之

要旨

本研究は、放牧酪農への新規参入者を支援する酪農家などによる自主的グループの役割を明らかにすることで、新規参入者の拡大、定着による放牧酪農の発展に寄与することを目的として、北海道内における酪農家の自主的グループの役割及び新規参入者の経営確率過程におけるパーソナルネットワークに注目して研究を行った。

その結果、新規参入者のパーソナルネットワークは、就農までのプロセスが大きく影響を与えること、そしてそのプロセスにおいて自主的ネットワークでのつながりは、ネットワークの形成に重要な役割を果たしていることが明らかとなった。

また、就農後の年数の経過に伴って、ネットワークの質は、「教えてもらう」というものから「つなげる」、「発信する」、「刺激を受ける」というものに変質すること、さらに農業経営以外の地域社会へのゲートキーパーとなるネットワークの重要性が明らかとなった。

この結果を踏まえて、今後の支援方策へのインプリケーションとしては下記の点を指摘した。①新規参入初期のネットワークに影響を与える就農までのプロセスにおいて、各個人の研修成果（ネットワーク）を新規参入者支援者の中で共有するための仕組み、②地域社会へのゲートキーパーの役割の明確化、③新規参入者が見落としがちな「兆候」をみつけるため、経験があり信頼関係のある放牧酪農家による定期的な牧場訪問。

緒言

日本の酪農業にとって放牧による新規参入者は、生乳生産量の維持のみならず、地域社会の維持といった点からも重要であり、新規参入者の就農支援策についての研究がなされている。しかし、参入後の支援についての研究はあまりなされていない。そこで本研究では、新規参入者の経営確立においてパーソナルネットワークの果たす役割とその変化、ネットワーク形成に対する酪農家の自主的ネットワークの機能について明らかにする。それを踏まえて今後求められる支援のあり方について検討することを目的とする。

研究方法

1. 研究目的

放牧酪農新規参入者を支援する酪農家などによる自主的グループの役割を明らかにすることで、新規参入者の拡大、定着と酪農の発展に寄与することを目的とする。

2. 調査計画・方法

上記の目的を達成するために、就農前、就農後（スタートアップ期および経営確立期）において新規参入者が直面する課題を、技術的課題、経営的課題、社会的課題にわけて明らかにし、その課題解決過程を「誰から、どのような支援をうけて解決したのか」という視点から明らかにする。

方法としては、北海道北部地域を中心に活動している放牧酪農家を中心とした自主的グループ「もっと北の国から楽農交流会」のメンバー7人を対象として聞き取りを実施した。就農から定着プロセスの異なる段階に位置する対象者に対して、それぞれの時点で「いま最も課題となっていること」について聞き取りを行う。

3. 先行研究の状況

新規参入への支援については、就農までのプロセスに注目した研究がなされてきたが、最近では新規就農支援制度の充実に伴って就農後の支援についても注目されている⁽⁶⁾⁽¹⁰⁾。その中でも自主的なグループに注目した研究は十分にはおこなわれていない。

一方、申請者は酪農家が形成するパーソナルネットワークと経営のスタイルとの関係について研究を行ったが、本研究でもその研究手法をベースにしておこなう⁽⁵⁾。

新規参入者の経営ステージと地域での「橋渡し役」の役割について研究したものに島(2013)がある⁽⁶⁾。ここでは、橋渡し役農家の役割を「メンタリング」の研究成果を援用した9の機能に分類し、新規参入者がその機能について評価した結果を基にして順位付けを行っている。メンタリング機能についてキャリア的機能としての①スポンサーシップ、②コーチング、③保護、④表出、⑤挑戦的な仕事の提供、心理・社会的機能として⑥役割モデル、⑦カウンセリング、⑧受容と承認、⑨友好である。この研究は、新規参入者の就農後の支援に着目し、その支援のあり方についていわゆるインフォーマルな農家グループ

の機能について着目している点で、本研究と共通の問題意識を有している。

4. 本研究の特徴と意義

酪農を希望する新規参入者のなかでも放牧酪農という経営形態を志向する人たちが一定数存在している。しかし、気候、土壌などの土地条件や牛群の特質に大きく左右され、マニュアル化することが困難である放牧の技術特性からみて、新規参入に対しては放牧を実践している酪農家による自主的グループによる就農前、就農後の支援が重要な意味を持っている。

現在の酪農経営のサポート体制である農協、農業改良普及員、飼料メーカー、獣医師などは、技術的には通年舎飼い体系を主対象として発展してきたため、それらではカバーできない放牧においては自主的グループの役割は重要であると考えられる。

本研究は、島が指摘したような「メンタリング」機能の分類も念頭に置きながら、新規参入者のパーソナルネットワーク（エゴネットワーク）を把握する⁽⁹⁾。自主的グループ以外のネットワークもふくめて、新規参入者の経営確立におけるネットワークの形成論理について動的に明らかにしようというものである。

新規参入者の経営者としての確立過程は、同時に生活をする地域における役割形成の過程でもある⁽⁸⁾。本研究では既存研究でとりあげられてきた「農業経営」の確立、成長という自我形成のプロセスのみではなく、それと同時に参入する地域においてどのような役割を果たしていくのか、という点についても注目をして分析を行う。

結果

1. 北海道における放牧酪農の再発見と自主的ネットワーク組織の役割

1) 放牧酪農の再発見

北海道における放牧酪農は独特の歴史をもっている。放牧は北海道酪農の近代化が進められる以前には、ごく一般的な飼養形態であったが、1960年代以降に進められた農業の近代化によって放牧は土地利用効率の低さから徐々に姿を消していった。しかし、農業近代化の矛盾が表出するようになり、矛盾の象徴としての新酪農村計画の失敗や負債問題という社会問題への農民的対抗手段として、放牧は再び注目を集めるようになった。そうした歴史的文脈のなかで放牧酪農は理解されてきた⁽¹³⁾。

そうしたなかにおいては、近代化農業の推進役の一つであった農協系統、さらには国や北海道の農業試験場、普及センターなどとの指導機関において、放牧酪農が正面から研究対象とされることはなかった。

その一方で、1980年代から酪農家の主体的な学習活動としての「マイペース酪農交流会」による経営改善の取り組みが研究者などによってあらためてその有効性が認識され、放牧はいわば「再発見」されることで徐々に意義が認知されるようになった。また、別の流れとして、研究者や農業資材輸入メーカーによって、ニュージーランド方式によるいわゆる「集約放牧」という技術や考え方が紹介され、その実践者が実際に高い経営成果を上げることで注目されるようになった⁽³⁾。

そうした変化を受けて、公的機関においても放牧酪農マニュアルの作成など、放牧の普及のための取り組みが見られていった⁽⁷⁾。

そうしたマニュアル作りとは逆に、放牧をいわば見て学ぶ「職人の技術」としてとらえるという動きがあり、その一方で「科学的知識」にもとづいた技術としてとらえようという動きが、酪農家や酪農のコンサルタントによって展開がされた。

いずれにしても、放牧酪農という飼養形態をどのようにとらえるのか、それをどのように支援するのか、という点については様々な見解が見られてきたのが事実である。

一方で、そうした論争を経て放牧を実践し再発見を担ってきた「第2世代」に次いで、現在は「第3世代」として次の動きが見られている。それは、そうした論争に直接的には関わらず、ドライに技術として放牧をとらえ、または「職人」の道を目指して、放牧酪農を始める世代が増加している。

いち早く地域として放牧に取り組んでいた足寄町は、今や放牧を目指す新規参入者のメッカとなっており、就農を待っている研修生が複数名存在するような状況である。

2) 北海道における放牧・新規就農者関連の研修・交流会

放牧酪農が「再発見」されて以降、放牧酪農への関心の高まりの中で各地に自主的な研修・交流組織が形成されていった。その中心となったものが、前述した足寄町放牧酪農の研究会である。研究会の活動内容のベースとなっているものは、前述したマイペース酪農交流会の活動である。経営主のみならず、夫婦同伴での勉強会への参加、各自の経営内容

を公表した上での経営改善に向けた取り組みという方針は、マイペース酪農と同様の内容となっている。

研究会は、放牧によって経営改善を図るという明確な目的を持っていた。地域で経営不振にあった酪農家が、ニュージーランドでの視察を経て、放牧による低コスト酪農への転換を図るため、地域の有志を集めて研究会を組織したのである。そしてその活動を町がサポートしながら進められた。

足寄町は、こうした取り組みも踏まえて、「放牧酪農の街宣言」を出し、毎年1回、全道の放牧酪農家、および関係者を集めた交流会を開催し、放牧酪農における自主的ネットワークの一つの中心点となっている。

しかし、こうした放牧研究会の動きのみでは、放牧の技術については実証的、科学的に伝えるという取り組みについては不十分であった。前述したように放牧技術の「職人技」的な側面を強調することでは、放牧による新規参入希望者へ技術を伝えていくことができないという状況に危惧を抱いた猿払村の小泉浩氏らが、あらたに「科学的に放牧技術を学び、伝える」ことを目的として天北放牧ネットを組織した。

その一方で、マイペース酪農交流会に源流をもつような交流組織として道北地域でも「もっと北の国から楽農交流会」が、枝幸町の石田幸也氏によって組織されている。

現在ではそれぞれのネットワークの特徴を尊重しながら、合同で勉強会を開催するという関係となっている。

では、今回の調査地である道北地域の放牧酪農に関するネットワーク及び研修会の現状についてみてみよう。

(1) 天北放牧ネット

天北放牧ネットの特徴を理解するには、天北地域酪農の特質を理解する必要がある。道北地域、なかでも宗谷管内は、畑作限界地に展開していった北海道酪農のなかにあって、十勝の周辺部、根釧とらぶらぶ一大酪農地帯である。畑地型酪農として大規模・高泌乳化路線で展開してきた十勝、大規模かつ継続的な開発投資に裏打ちされて、大量の離農発生とともに草地型大規模酪農地帯として展開してきた根釧地域に対し、道北酪農地帯は、猿払村の戦後開拓に代表されるように戦後によりやく本格化した開発投資によって、湿地改良などの農業開発をはじめとした社会資本整備が進められた。しかし低い農家定着率などは、無駄な開発として社会問題化するまでになった。そうした道北における開発政策は、世界銀行のバックアップを受け、その後もパイロットファーム、新酪農村建設事業というように大規模かつ連続的に展開した根釧に比較して、二次的な位置づけにあったといえよう。

こうした歴史的経緯が道北地帯の酪農地帯の性格にも影響を与え、現在の中規模な草地型酪農地帯を形成している。また、天北地域では土壤凍結がないために放牧に適したペレニアルライグラスの栽培が可能であることから、放牧を取り入れた経営が多いという特徴もある。

しかし近年は、酪農情勢の変化によってTMRセンターの建設や大規模協業法人の設立といった地域農業の再編が見られているが、一方でこの地域の特性を生かした中小規模な放牧を取り入れた経営も展開している。そしてこうした放牧経営は酪農を希望する新規参入者を引きつけることになり、数多くの新規参入者が放牧酪農を実施している。

ところが、道北地域には浜中町や別海町のような新規参入者の受け入れ研修施設がない。他の地域でも同様であるが、希望者は酪農ヘルパーや研修生をしつつ農村に滞在しながら、農業開発公社の農場リース事業を利用して参入するというのが主要なルートとなっている。公社事業自体はその実績からいっても大きな役割を果たしているが、実際に就農可能なのは、物件と自分の経営意向が合致するなどタイミングがあった場合に限られる。

また、新規参入者への助成を行っている自治体も見られるが、そうした助成を受けた場合、当然ではあるが必ずその自治体に就農することが義務づけられている場合が多い。

また、酪農家の実習生という形態で参入の機会をうかがっている希望者が、必ずしも実習先で適切な実習を受け、技術や経営ノウハウを学ぶことが出来ていない、という問題もある。

こうした背景を受けて、その解決の一つの糸口にと設立されたのが天北放牧ネットである。現会長である小泉氏は自身が新規参入者である。氏の場合は「タイミングがよく」自らの経営意向と合致した農場に入植することが出来た。氏は地域のヘルパー利用組合の組合長をやっていた時期に、数人の新規参入希望者に牧場の情報を知らせるなどの窓口としての機能を果たしてきた。その中で、牧場の物件情報や放牧に関する技術の情報入手が困難なことを実感してきた。

天北放牧ネットは、こうした氏の経験やそれに賛同した様々な関係者によって設立されたのである。

天北放牧ネットでは、年に1～2回のセミナーの開催、さらに定期的な牧場視察をおこなっている。特に近年では、新規参入希望者への支援という目標を明確にした新規参入者支援セミナーの開催に力を入れている。

(2) もっと北の国から楽農交流会

もっと北の国から酪農交流会（以下「もっと北の国から」）は、枝幸町に新規参入した石田氏が、主に道北地域での放牧酪農による新規参入者の交流を目的に設立した自主的交流組織である。その組織のモデルは、別海町を中心として1980年代より活動していた前述した「マイペース酪農交流会」である⁽¹⁴⁾⁽¹²⁾。

組織の目的は、地域で孤立しがちの新規参入者同士が家族ぐるみで、営農、生活の悩みを共有すると言うことが一番の目的である。石田氏の経験に基づく具体的な経営上のアドバイス以外にも、「よそ者」として地域で暮らすこと、子育ての悩みなどが共有される場である。

活動は農閑期を中心として、石田氏の自宅を会場とした月に1回程度の交流会の他、近年では毎年秋口にかけて、別海町のマイペース酪農交流会との交流として、三友氏（マイペース酪農交流会）をまねいたフィールド研修を行い、放牧酪農家の牧場を会場とした研修を行っている。

交流会の活動自体には、新規参入者を始め、放牧を実践している若手を中心とした酪農家、さらにはこれから就農参入希望者が集まっている。活動内容自体は特段に特徴のあるものではないが、後述するようにそこで生まれたネットワークは、新規参入者の就農までのプロセス及び就農後に重要な影響を与えている。

(3) その他研修会

行政主体の研修会としては、北海道宗谷総合振興局および普及センターが事務局を行っている「SOYA ルーキーズカレッジ」がある。これは2年間にわたり12回の講習を行うというものであり、2011年からスタートした。活動内容は放牧に限定したものではないが、新規参入者への酪農技術全般・基礎的知識の習得を目的とした活動である。

また、1999年に設立された「放牧を考える会」は、定期的に現地研修や講習会を行っている。

2. 北海道における酪農新規参入者の実態

1) 近年の新規就農動向

酪農の新規参入者の実態に入る前に、北海道における新規就農の近年の動向をみてみよう。表1によると年によって変動はあるが毎年600～700人が新たに新規就農しており、その主流は農家子弟の就農（新規学卒およびUターン）である。農外からの就農である新規参入者は60～90人/年で推移している。

酪農についてみると、毎年200人弱が新規就農しており、うち新規参入は10～20人である。酪農家全体は毎年200～300戸の減少となっていることから新規就農者だけでは農家戸数の維持は出来ていないというのが現実である。

ここ数年は、酪農情勢への不安感から新規就農者は減少傾向にある。これまでは一戸あたりの生産量拡大によって北海道全体としての生産量を維持してきたが、現在は毎年数%ずつ減少する事態となっている。生産現場では、さらなる規模拡大に向けた支援策を講じる一方で、戸数の減少によって地域コミュニティーや生活インフラの脆弱化といった問題が生じている。そうした中で、地域社会を維持するためにも新規参入者への期待は高まっている。

表1 北海道における新規就農者数の推移(単位:人)

	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012
新規就農全体	697	671	728	653	695	650	599	611	700	678	626
うち新規学卒	364	338	391	331	323	298	276	245	302	309	223
うちUターン	247	253	266	267	303	264	257	299	337	290	312
うち新規参入	86	80	71	55	69	88	66	67	61	77	91
酪農への新規就農	199	206	194	182	182	169	159	174	190	168	128
うち新規学卒	110	111	119	107	98	91	93	95	91	93	51
うちUターン	68	69	56	61	53	57	49	63	80	54	60
うち新規参入	21	26	19	14	31	21	17	16	19	21	17
うち農場リース事業	13	14	11	11	12	12	10	9	7	11	9

資料)北海道農政部調べ

2) 農業リース事業による新規参入

北海道における酪農の新規参入において重要な役割を果たしてきたのが、北海道開発公社による農場リース事業である。この制度は、1982年度から開始されて現在（2012年度）まで333名が就農するという実績を残している。

農場リース制度による新規就農者を整理したものが表2および表3である。各年の人数は、事業予算の関係で毎年10名程度である。年齢的には20才代および35才までが大半を

占めている。出身地は道外が約 2/3 であり、実習経験は 5 年未満が半数近くとなっている。

表2 農場リース制度による酪農の新規参入者の年次別状況(単位:人)

	就農人数	年齢区分(才)				出身地		実習経験(年)			離農者
		~30	30~35	36~40	41~	道内	道外	~5	6~10	11~	
1982	5	2	3			4	1	3		2	
1983	5	3	2			1	4	2	3		1
1984	10	9	1			4	6	5	5		2
1985	10	7	3			3	7	5	2	3	4
1986	10	6	3	1		5	5	5	3	2	1
1987	10	4	4	1	1	8	2	3	5	2	3
1988	10	5	2	1	2	3	7	6	3	1	1
1989	10	3	5		2	4	6	4		6	1
1990	10	2	6	2		1	9	3	4	3	1
1991	10	4	3	1	2	2	8	4	2	4	1
1992	14	2	6	2	4	11	3	2	2	10	1
1993	15	2	4	4	5	10	5	4	2	9	3
1994	11	2	2	4	3	5	6	4	4	3	
1995	9	3	4		2	3	6	3	4	2	
1996	12	3	4		2	3	6	3	4	2	
1997	13	5	4	3	1	4	9	5	5	3	
1998	11	5	2	3	1	5	6	7	2	2	
1999	12	3	6	1	2	4	8	6	5	1	
2000	14	5	4	3	2	4	10	12	2		
2001	12	6	2	3	1	3	9	7	4	1	
2002	13	4	8	1		3	10	13			1
2003	14	8	3	3		1	13	9	5		
2004	11	3	4	4		1	10	6	4	1	
2005	11	1	7	2	1		11	9	1	1	
2006	12	3	4	4	1	4	8	7	4	1	
2007	12	3	7	2		4	8	6	4	2	
2008	10	3	5	2		3	7	4	5	1	
2009	9	8	1			2	7	5	4		
2010	7	3	1	1	2		7	3	3	1	
2011	11	2	3	5	1	3	8	6	2	3	
2012	10	3	2	4	1	4	6	6	2	2	
合計	333	122	115	57	36	112	218	167	95	68	20

資料)須藤純一「新規就農者の実態と課題および支援」(天北放牧ネットワーク交流会、2013年9月28日、於猿払村)報告資料より引用。

注)元資料は北海道農業開発公社資料より。

就農地域をみると、研修牧場が整備されている別海町や浜中町のある根釧地域が全体の半数近い人数を受け入れており地域に偏りがある。今回の調査対象地である天北地域は 58 名となっている。1980 年代は毎年 3~5 名の参入者がいることから、天北地域は根釧地域が研修牧場を整備する以前から新規就農を受け入れた先駆的地域であった。しかし、その後根釧地域において受け入れ体制が整備されていくに従って、新規参入の中心は根釧に移ったため、天北地域への参入者数は減少した。2000 年前後にまた若干の人数の増加が見られたが近年はまた人数が低下傾向にある。

表3 農場リース制度による酪農の新規参入者の年次別状況(単位:人)

	地域					農地面積 (ha)				成牛頭数				取得価格(百万円)			
	天北	十勝	網走	根釧	その他	～40	40～50	50～	平均	～40	41～50	51～	平均	～40	40～50	50～	平均
1982	2		1	2		1	3	1	43.1	3	2		40	2		3	59
1983	1		1	1	2	3	2		38	3	2		36		1	4	61
1984	4		1	5		1	1	8	59.7	1	4	5	47	1	3	6	60
1985	4	3			3	5	3	2	39.5	3	6	1	41	2	3	5	50
1986	5	1		4		1	4	5	51	4	5	1	41	1	5	4	55
1987	5	2		2	1	5	3	2	44.8	2	6	2	47	3	4	3	52
1988	3	1	1	5		4	2	4	52	4	5	1	41	2	4	4	47
1989	3		2	4	1	1	2	7	57.6		7	3	50	1	4	5	57
1990	3	1		4	2	3	4	3	50.4	4	1	5	46	6	1	3	45
1991	1	2	2	5		3	1	6	59.2		4	6	51		3	7	57
1992		1	2	9	2	1	1	12	76.8	2	3	9	57	6	1	7	39
1993	3		2	9	1	3	5	7	52.1	4	4	7	51	10	2	3	32
1994		2		8	1	3	2	6	51.8		6	5	52	5	4	2	38
1995	2			7			2	7	66.7		6	3	52	6	2	1	36
1996	1	1		9	1	2	1	9	63.5		3	9	54	4	3	5	48
1997	2	1	4	6		2	3	8	52.8		3	10	63	8	3	2	36
1998		1	2	7	1	1	5	5	57.4		2	9	60	7	1	3	39
1999	2	1	1	7	1	4	1	7	50.3		2	10	55	8	1	4	40
2000	2	1	2	8	1	1	3	10	62.4		3	11	66	6	3	5	50
2001	1	3	2	6		3	2	7	57.3		2	10	56	1	6	5	48
2002	2			8	3	4	1	8	51.1	1	10	2	41	6	4	3	35
2003	3	2	2	6	1	2	3	9	50.3		7	7	51	12	2		29
2004	2	2	1	4	2	1	1	9	56.2		1	10	59	8	3		32
2005		1	2	7	1	4	2	5	46.4		1	10	65				
2006	2	1	7	2		3		9	56		11	1	44	3	3	6	51
2007	1	3	7	1		4	1	7	54.9		9	3	47	4	3	5	49
2008	1	1		6	2	2	2	6	55.9		2	8	60	2	3	5	49
2009	2	2		5		1	3	5	53.5		4	5	50	3	3	3	46
2010			1	5	1	1	1	5	55.5		1	6	65	1	1	5	54
2011	1	2	1	7			2	9	62.7			11	66	2	1	8	58
2012	3	1		5	1	4	6	6	58.1		1	9	60	3	2	4	46
合計	58	35	34	175	31	73	72	194		31	123	179		123	79	120	

資料) 須藤純一「新規就農者の実態と課題および支援」(天北放牧ネットワーク交流会、2013年9月28日、於猿払村)報告資料より引用。

注) 元資料は北海道農業開発公社資料より。

今回の調査地である天北(道北)地域の新規参入者の現状を整理すると、1980年代にかけて参入した人たちが、現在は年齢的にも離農、経営継承を迎えている。現在50歳前後の先発的な新規参入者が、自らの経営継承と同時に地域維持のための新規参入者支援という課題を抱えているのである。

天北地域は全道的な生乳生産量の減少傾向の中で、既存の農家による規模拡大を進めるという課題も同時に抱えている。根釧地域に比較して、経営規模が小さい天北地域では、規模拡大による生乳生産量の確保が目指されている。しかしその一方で、新規参入者が放牧酪農によって新規参入するのに適した地域であるという条件がある。比較的小規模での就農が可能であり、地価が安くさらには放牧に適した草種であるペレニアルライグラスの生育が可能である。このように新規参入により放牧を開始するためには有利な地域である。

放牧による新規参入への好条件と、一戸あたり生産規模拡大による生乳生産量の確保という課題を同時に地域内に抱えている点が、天北地域の特徴である。

3. 新規参入者における酪農経営とパーソナルネットワーク

1) 調査目的と方法

ここでは、新規参入者の参入経過を整理した後に、現在の経営主のパーソナルネットワークを把握し、さらに、2013年における最も重要な営農の課題についての認識とそれに対する対応方法について、事例的に明らかにする。

こうした調査設定の狙いは以下のものである。既存研究において、新規参入者の定着過程における地域によるサポート、ネットワーク（組織的なもの、またはインフォーマルなもの）の重要性が指摘されている⁽¹⁰⁾。しかし、そうしたネットワークと実際の新規参入者の行動との関係は明らかになっていない。社会学的には、前述したようなパーソナルネットワークの形成の中で、経営確立のための自我形成とともに地域社会における役割形成がどのようになされているのか、という点についても注目をして分析を行う。

各自が持っているパーソナルネットワークに影響を与えるものとして、新規参入までの経過とそこでの様々な人とのつながりが想定される。いわば初期値としてのネットワークである。そうした初期ネットワークは、地域に入り込んでいく過程で地域とのネットワークをあらたに構築し、またはすでにある地域のネットワークに「接続」することで、自らの新たなネットワークを形成していくと考えられる。

そのために、新規参入者の就農に至るプロセスを把握し、さらに就農後の年数の異なる経営主を対象とした調査を行った。調査では、経営概況の把握とともに、就農までの経過、放牧技術の特徴と技術採用のプロセス、2013年度の営農上の最も重要な課題とそれへの対応、そして経営主が持っているパーソナルネットワークについての聞き取り調査を行った。

本章では、就農年数の浅い順に、上記の項目について聞き取り調査結果の整理する（本文中の記述は調査時点である2013年を基準としている）。

2) パーソナルネットワークの把握と分析方法

本研究では、個人のパーソナルネットワークを把握するために、下記のような方法を採用した。調査対象者に対して「あなたが営農・生活をする上で重要だと考えている人物について、具体的に思い描いて下さい」という質問を行った。その結果具体的に挙げられた人物について、属性、つきあいの契機、内容、頻度、人物同士の関係性（上げられた人物同士が互いに知り合いかどうか）を聞き取りした。

その結果を下にして、人物間のつながりをグラフとよばれる図に示した。グラフ化に際しては、有向性（どちらから接触するか）、接触頻度を考慮して作図を行った。接触頻度については3段階で評価し、一つの内容（農業だけ、または生活のことだけ等）のつながりを1、複数（営農上も生活上も）の場合は2、そして複数でさらに接触頻度が高い場合は3として、矢印の大きさを示している。

3) 調査対象者の概況

聞き取り対象者の概況を示したものが表4、表5である。今回の調査では、放牧酪農に関する自主的ネットワークである「もっと北の国から楽農交流会」に参加しているメンバー

のなかから、就農後経過年数 10 年以内の新規参入者 7 名を選定して実施した。

就農している地域は、北海道の天北地域である。参入者の出身地については、全員が北海道外からとなっている。また、就農にむけて行動を開始してから、就農までの経過年数をみると、短くて 3 年で、長い人では 12 年を要している。全国農業会議の調査によると、酪農への新規参入者の就農までの経過年数は 5 年以上というものが半数以上を占めているが、今回の調査からも 5～7 年程度が多くなっている。

経営規模をみると、経産牛頭数は 30～50 頭が大半であり、北海道の中でも中・小規模の経営となっている。

表4 調査農家の概要

	年齢	出身地	家族構成	就農年	就農までの 年数	面積(ha)	経産牛頭 数(頭)
No.1	30	茨城県	妻、子供	2012年	7年	72	48
No.2	39	東京都	妻、子供	2011年	6年	60	38
No.3	31	埼玉県	妻、子供	2009年	5年	60	47
No.4	37	神奈川県	妻	2008年	12年	45	37
No.5	36		妻、子供	2008年	5年	67	49
No.6	33	東京都	妻、子供	2006年	3年	80	30
No.7	44	愛知県	妻、子供	2004年	3年	50	44

資料)2013年12月実施調査より作成。

表5 事例農家の経営概況

面積(ha)	経産牛 頭数 (頭)	放牧専 用地 (ha)	兼用地 (ha)	採草地 (ha)	放牧方式	年間出 荷乳量		一頭あたり 乳量 (kg/頭/年)	1日あたり乳量		飼料給与 放牧期 粗飼料	舎飼期 粗飼料		飼料給与 放牧期 粗飼料	飼料給与 舎飼期 粗飼料
						2012 (トン)	2013 (トン)		ピーク (kg/日)	最小 (kg/日)		供給飼料	供給飼料		
No.1	72	48	20	6	46	一牧区定置式	285	340	6,500	1400kg(6月)	なし	配合3kg、 BP2kg、大 麦・コーン 1.5kg	ロールバック	配合3kg、 BP2kg	
No.2	60	38	15	7	38	一牧区定置式	220	200	5,000	740kg(6月)	なし	配合2～4kg、 BP2～4kg、 コーン1kg	ロールバッ ク、乾草	配合2～4kg、 BP2～4kg	
No.3	60	47	15	8	37	一牧区定置式	280	313	7,000	1400kg(6～7月)	なし	配合3～6kg、 ペースベレット 3～6kg	ロールバック	配合3～6kg、 ペースベレット 3～6kg	
No.4	45	37	23	18	4	6～9牧区	324	320	7,200	1260kg(5～7月)	ロールバック (一番)	配合3.4kg	デントコーン・ ロールバック	配合4.4kg	
No.5	67	49	20	30	17	1牧区定置式	420	430	9,000	1500kg(5～6月)	ロールバック	配合4kg、 BP2kg、コーン 2kg	ロールバック	配合6kg、 BP2kg、ルー サン	
No.6	80	30	30	30	20	3牧区	170	160	5,300	5～6月	なし	配合0～4kg、 BP0～4kg	乾草	配合0～4kg、 BP0～4kg	
No.7	50	44	15	7	28	3牧区	316	316	7,800	1200kg(6月)	ロールバック	配合2～ 3.5kg、 BP2kg、コーン 2kg	ロールバック	配合少量、BP 少量	

資料)2013年12月実施調査より作成。

3) 2013 年度における経営上の課題と解決 (表 6)

2013 年は北海道のなかでも特の道東、道北地域は 6～7 月にかけて干ばつ傾向で推移した。その結果各地で牧草収量の低下が見られたが、放牧酪農もその例外ではない。各経営における具体的な対応については後述するが、ここでは全体的な特徴を整理してみよう。

干ばつの影響を最も重要な課題として上げたものは No.2 および No.3 農家である。彼らは干ばつによって直接的な影響を受けている。特に No.3 農家は低酸度乳の発生によってバルク乳を廃棄するという事態が発生している。彼らに特徴的なのは、干ばつによる粗飼料採食量の低下という、その後大きな問題につながる兆候を見逃しているという点である。

No.3 では、実際に採食量の低下に気づかずに低酸度乳が発生しており、また No.2 においても、偶然に牧場を訪問した酪農家に牛群の状態を指摘され、初めて放牧草以外の粗飼料給与を行うという対応をとっている。放牧において指摘される「採食量がわからない」という技術的特徴が、そのまま問題となっている。

No.1 農家においては、干ばつの影響については直接的には上げられていないが、放牧地の過食ということを通じて 2014 年の放牧地に影響が出るかもしれない、と考えている。

一方で No.6 または No.7 農家では、干ばつに起因する具体的な課題は認識されていない。地域的には同様の干ばつの影響を受けてはいるが、経営としてそれに対応した、と言うことが示唆される。

就農年数が長くなるにつれて経営上の課題も変化している。No.4 農家は就農後の年数は短い、12 年という長い研修期間を有している。そこで 2013 年の課題として上げられたのは、発生した問題に対する対処という課題ではなく、経営をよりよくするための課題である。また、No.7 では新たな施設投資という課題に直面している。

もう一点指摘できる点は、No.6 における牧草収穫時期の遅れや、表出はしていないが No.7 農家における季節分娩の時期的ずれ込みという課題への対応である。これらは、どちらも経営として対処すべき重要な課題であることに違いはないが、いずれも、問題は認識しつつも、それを前提とした経営を行っているという点が特徴である。つまり、経営者として、コントロール可能な問題と、それを前提として経営を行うという課題を区分していると言うことが考えられる。

表6 2013年度の課題と解決方法

	課題	解決方法	干ばつへの考え方	備考
No.1	夏(放牧期)の繁殖管理(季節分娩にするため)	配合飼料の変更(飼料メーカー・周囲の酪農家(No.1)の情報で)。獣医師に妊鑑を依頼	今年は影響なかった。来年に影響が出るかもしれないが。	
No.2	干ばつへの対応	偶然訪問した酪農家に指摘されて、粗飼料を給与。		
No.3	低酸度乳の発生	粗飼料の給与(知り合いの酪農家(No.1)にきいて		
No.4	糞を見て配合飼料給与量が多いのではないか	給与量の削減および草地の改良	夜間放牧にして、牛舎内でロールを給与	具体的問題への対応ではなく、経営改善の取り組み
No.5	乾乳期の飼養管理(分娩後事故)。育成舎の増設。	乾乳期の飼料給与メニューの変更(普及センター主催セミナーを受けて)。		
No.6	牧草収穫時期の遅れ	具体的対応はなし。周りに乾草をとっている酪農家はいないので、知り合いの酪農家に確認。	とくになし	
No.7	機械更新	リース事業にてマニユアスプレッターを購入	とくになし	

資料)2013年12月実施調査より作成。

注)解決方法にある農家番号は、各事例農家のパーソナルネットワークを参照のこと。

4) 事例

(1) No.1 ～就農2年目のA氏～

①経営概況と地域の特徴(表7)

就農2年目のA氏が就農したA町では農場リース事業による新規参入の事例はなく、これまでの新規参入者はすべてが居抜き方式による経営継承となっている。町は、使途自由の助成金の他に、固定資産税の一定期間免除および農地のリース料金の補給など、金銭的に手厚い助成措置を行っている。

A氏も前経営主との3年間の伴走期間を経て居抜きで就農している。A氏が入ったK地区では、6戸の酪農家中4戸が新規参入者であり、その全員が放牧を行っている。

表7 No.1農家の経営概況

経営面積(ha)	自作地	72	年間出荷乳量(トン)	2012年	285	
	借地	0		2013年(予測)	340	
	合計	72	一日あたり乳量(kg)	ピーク(6月)	1400kg/日	
土地利用(ha)	放牧専用	20		最小		
	兼用地	6	一頭あたり年間乳量(kg/頭/年)		6,500	
	採草地	46	平均乳成分	乳脂肪	3.56~4.8	
				タンパク	2.9~3.7	
飼養頭数	経産牛	48	分娩間隔		400日	
	うち搾乳牛	48	初産月例		24ヶ月	
	育成牛	26	平均産次数		4.0	
牛床		60	飼料給与	舎飼い期	粗飼料	ロールバック
方式	スタンション			配合	TDN74, CP18	3kg
放牧時期	1977年建設			ビートパルプ	2kg	
	5月中旬~11月上旬			その他	なし	
放牧方式	昼夜放牧・終牧時期は昼間のみ		放牧期	粗飼料	放牧草が足りないときは牛舎にて一番草	
	一牧区・定置式			配合	TDN76, CP16	3kg
農場購入価格	6000万円			ビートパルプ	2kg	
農場リース事業の利用有無	無し			その他	大麦・コーン	1.5kg
自治体支援・助成	500万円	町からの助成金				
	300万円	町から固定資産・農地リース料の補給				

②就農までの経過

A氏は帯広畜産大学の畜産科学科の卒業である。ラグビー部のマネージャーで三つ上の先輩が現在の妻である。先に卒業した妻は1年間OLをやっていたが就農を希望して上士幌町の新村牧場にて実習を開始した。しかし牧場のカフェ部門への配属となったために、上士幌の別の酪農家にて1年半の実習をしていた。その後、経営主の卒業を契機に二人で大樹町に移り、それぞれ別の牧場で研修をおこなった。経営主は大規模な牧場で一年弱実習生として研修を行った。その後、将来就農する規模の近いところでの実習を希望して足寄の放牧酪農家にて実習した。実習中夏期に一週間の休日をもらい、足寄町で開催された交流会で知り合った石田氏、小泉氏の牧場見学のために道北をまわることとなった。

その際に折角行くのだからと、以前に北海道担い手センターで入手したパンフレットで支援が充実していたA町に突然立ち寄った。そこで案内されたのが現在の牧場である。本人は直感的にいいと感じたが、妻は初めて実際に見た物件だった。

その年の秋に石田氏のところで開催された「もっと北の国から」の研修会に参加するために道北に来たときに、石田氏と三友氏が現在の牧場を見学にいき、購入を進められた。それが後押しとなって、その後大樹から2~3回、前経営主の所に通いながら就農希望を伝えた。

その結果、新規参入が決まり2009年の1月にA町に移住した。最初は町内に住んでいた

が、すぐに町が牧場内に設置したスーパーハウスに移住した。2009年2月から2011年12月までが前経営主との併走期間であった。前経営主が65才までの営農を希望したために実質3年間の研修となった。この3年間について、初めて移住してきた町であり、さらに初めての子育て期間と重なっており、その間に部落の婦人会や保育園に行く前の子供達の集まりなどで地域になじむための助走期間として良かったと考えている。

③放牧技術の特徴と技術採用のプロセス

基本的には、前経営主との3年間の併走期間の技術を継承しているが、いくつかの点で経営主独自の取り組みが見られている。その一つが牧区の変更である。前経営主は放牧地をバラ線で3つに区切り輪換放牧を行っていたが、現経営主は初年度からそれを変更し電牧による1牧区とした。その理由は、バラ線の準備が大変だったということがあり、また、学生時代に足寄町で実習した牧場において1牧区で放牧していたことを見ていたということがある。

配合飼料の給与についても前経営主は通年で配合飼料のTDN76、CP18のものを給与していたが、夏のMUNが上がるのを気になっていたので、夏はCP16のものをを使うようにした。

また、飼養管理技術として大きな特徴として、前経営主のやり方を踏襲して人工授精を行わずにマキ牛による繁殖を行っているという点が上げられる。現在ではあまりみられないこの方式を継続している大きな理由として挙げられるのが、同集落で新規参入した後述のNo.1農家が同様のやり方を採用しているという点がある。

放牧の考え方としては、季節分娩(2~4月分娩)にして、分娩直後には牛舎内でよい粗飼料を給与し、いい状態で放牧期を迎えたいという考えである。

④組織への参加状況(2013年の実績)

○フォーマルな組織

経営主のフォーマルな組織活動についてみてみよう。農協青年部には加入していないため、4Hクラブの活動が主である。同じ地域にも4Hに入っている人がいて、その人に誘われたことが契機であり、2013年は主に冬期間を中心として二ヶ月に1回程度、合計3回出席をした。初年度は積極的に参加していたが、最近は開始時間が夜8時以降の場合が多く仕事疲れで行く気が起きないということである。

そのほか、農業改良普及センターが開催する研修会に一度参加をした。内容としては、コンピューターを利用した牛群管理であり、参加者は全体で5、6人程度であった。その他の研修としては、資材メーカーが開催した研修会に参加をしたが、本人としては「製薬会社がサプリの宣伝をしていた」という印象を持っている。

一方、妻は農協の女性部の中で若い層を中心とした「若妻会」の活動にはほぼ毎回参加している。また、地域の婦人部活動には月1回、農業改良普及センターによる地元料理の料理教室、林業グループによるクリスマスツリーについての講習会にも参加している。

妻は、研修時代から婦人部に入っており、また、保健所に入れない子供の奥さん同士が交流する機会・場もあることから、研修期間に地域に馴染めたという点を上げていた。

○インフォーマルな組織

上記以外に、自主的な勉強会や日常的なつながりとしては、地域の人たちと時折バーベキューをする程度である。また、後述する同集落の新規就農者の先輩である Y 氏とは、頻繁に交流をしている。

⑤2013 年度の営農上の最も重要な課題とそれへの対応

営農上の課題としては、前経営主のやり方から先述したような季節分娩に持って行くための課題が挙げられている。そのため、繁殖兆候の観察、飼料の変更など、夏時期の繁殖管理が重要な課題と認識している。

放牧期の配合飼料を CP16 のものに変更したのも、飼料メーカーや地域の放牧をしている酪農家にきいた結果、MUN の数値を下げるための対応である。

また、マキ牛での種付けのため分娩の予定が把握できない状態であった。普及センター職員やホクレンの営業担当者が牧場に来たときに、妊娠鑑定をこまめにやるよう指導を受けた。現在では獣医師に妊娠鑑定を依頼し分娩時期を把握して対応できるようにしている。それによって「乾乳軟膏」を適切な時期に使うことができるようになったため、乳房炎が減少し、出荷流量の増加にもつながっていると、手応えを感じている。

また放牧地での繁殖兆候の観察などは、後述する No.1 農家が同様のやり方をしているために、それを参考にしながら対応している。

牧草収穫については、前経営主との伴走期間中も時期の判断は前経営主が行っていた。前経営主は、牧草販売をしていたため遅刈りにして収量を確保していたが、同様にやると牛の嗜好性が悪くなってしまうため、現在は周りの農家に合わせて収穫時期を判断している。

今年、道北地域で放牧を行っている酪農家の共通の課題は夏時期の干ばつによる草不足であった。A 氏はこの点については、今年の段階では問題はなかったと感じており、「今年の干ばつは来年にも影響するだろうが、強くは心配していない」と回答している。

⑥経営主が持っているパーソナルネットワーク

○概要と特徴

A 氏が持っているネットワークを整理したものが表 8 である。

前述した No.1 は同集落にいる新規参入の先輩である。おもに電話や直接会うことも多い。技術的なことをよく教えてもらい、何かあればすぐ電話するということで、最低でも週 2 回、毎日連絡をとるときもある。自宅に招いたり訪れたりの個人的な付き合いもある。

No.2 は前経営主で有り機械の使い方を主に聞く。初年度はもっと頻繁に質問したり、向こうから来ることもあったが、2 年目である今年は頻度が減ってきていると認識している。主に電話で連絡をとり、電話が月 2~3 回、会うのが月 1 回程度である。

No.3 は大樹町でヘルパーをやっていたことが有り、A 氏が南十勝ヘルパー時代に知り合っている。本格的な交流はお互い入植してからであり、特に妻同士の仲がいい。子供の年齢が近く、経営主の年齢も近い。妻や子供の関係で経営主同士会えば仕事の話をするようになり仲良くなった。月に一回連絡を取り、基本的には酪農関係ではなく、プライベート（生活面）での付き合いが中心である。

ネットワークの特徴を整理してみよう。前の経営主（居抜き経営）は初年度においては重要であったが、2年目にはその位置づけはやや低下して（機械の使い方、故障したなどの「ノウハウ、知識」の習得）、現在は隣にいて同じ新規就農で同じく本交で種付けしている No.1 と密接な関係となっている。知識の習得と共に、その実践過程についてのコーチング、スポンサーシップとしての機能を果たしている。実際に、普及センターや資材メーカーから、妊娠鑑定をこまめにやるようにという情報提供（指導）はあったが、本人曰く「わかっているけどできない」という状況であった。そうした中で、実際に No.1 が実践しているということから、自分としても行動に移すようになっている。

それに加えて、妻を契機としたつながり（子供同士）があり、No.3 とも頻繁に会うようになり、これが重要なつながりに発展している。

以上をまとめると、No.1 は地域とのつなぎ役である「ゲートキーパー」として大きな役割を果たしているとともに、放牧の先輩（コーチング）機能を果たしている。一方、No.3 は主に生活面でのつながりとなっていることから、放牧の仲間と言うよりも、同じ新規参入者としてのつながりである。

表8 No.1 農家のパーソナルネットワーク

番号	年齢	関係(知り合った契機)	会話頻度と方法	つながりの内容
1	44	同じ集落の新規参入者	週二回から多いときは毎日。直接会ったり電話したりする。	技術的なこと、営農上困ったことがあれば何でも聞く。
2	66	前経営主	電話は月2～3回、会うのは月1回	機械の使い方。
3	31	ヘルパー時代の知り合い・隣町で新規参入している。	月に1回ほど電話する。	家族同士のつきあい。年齢も使いため、酪農以外のプライベートな話を中心。

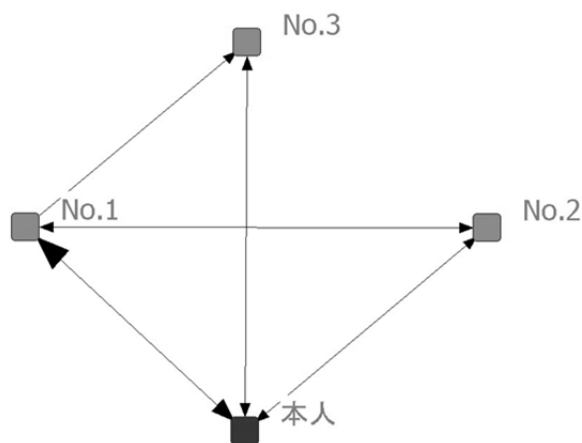


図1 No.1 のパーソナルネットワーク

(2) No.2 ～就農3年目のB氏～

①経営概況と地域の特徴（表9）

B氏が就農した道北のB町は、これまでに新規参入者の受け入れ実績がほぼなかったが、B氏の就農と同時に町として支援体制を充実させ、2014年度にはもう1人が経営継承（居抜き方式）をすることになっている。1992年に「B町新規就農者誘致特別措置条例」は制定されていたが、2011年にそれを改定して支援策を充実させた。支援内容は、農場リース

事業のリース料の半額助成、固定資産税の3年間の補助、農場リース事業のリース料に対する上限1,200万円の補助、そして5,000万円を上限とした借入金の利子補給である。

B氏は、同町初の新規参入者として上記の支援策を受けて就農した。その意味で地域の期待を一身に背負った事例ということができる。

表9 No.2農家の経営概況

経営面積 (ha)	自作地	26	年間出荷乳量(トン)	2012年	220	
	借地	34		2013年(予測)	200	
	合計	60	一日あたり乳量(kg)	ピーク(6月)	740kg/日	
土地利用 (ha)	放牧専用	15		最小(11月)	330kg/日	
		兼用地	7	一頭あたり年間乳量	5,000	
	採草地	38	平均乳成分		乳脂肪 3.89~3.97 タンパク 3.34~3.35	
飼養頭数	経産牛	38	分娩間隔	395		
	うち搾乳牛	30		初産月例	23ヶ月	
	育成牛	27	平均産次数	1.9		
牛床	47		飼料給与	舎飼い期	粗飼料 配合 TDN?, CP18	ロールパック・乾草
方式	タイストール					
放牧時期	1975年建設		放牧期	粗飼料 配合 TDN?, CP16	ピートパルプ	なし
	5月中旬~11月上旬					
放牧方式	昼夜放牧・終牧時期は昼間のみ					その他
	一牧区・定置式					コーン 1kg
農場購入価格	5400万円					
農場リース事業の利用有無	有り	(土地・機械600万円、牛1200万円、施設350万円)				
自治体支援・助成	350万円	町から施設修理費用の半額補助				
	17万円/頭	町の補助				
	150万円	リース料半額補助(5年間)				

②就農までの経過

B氏は東京都出身で東京都内の大学(地理学科)の修士課程を卒業後、冠婚葬祭事業を行う会社が経営している専門学校で「死生学」を2年間教えていた。その後介護医療の事務仕事を5年間やりながら、会社の介護ヘルパー2級取得のための講座の立ち上げなどに関わった。その時に現在の妻と知り合ったが、妻は大分県出身で、大学で生物学を学ぶなど、就農の強い意向を持っていた。その後結婚することになった。本人は前述の講座の立ち上げの仕事が一段落ついたというタイミングで就農を検討するようになり、その年の夏に東京で開かれた「農業人フェア」にて情報収集して、その時ブースを出していた別海町と浜中町での研修を決意した。

妻は動物、生き物が好きという動機が強かったが、本人は元々農業に対する関心は無かった。しかし大学修士課程で、沖縄県のお墓をテーマにフィールドワークを実施するなかで、地域に根を張って生きている人に対するあこがれや、農家の幅広い知識に対する関心が高まっていき、いずれは自分も地域に根付いた暮らしがしたいと考えるようになっていった。こうしたことが、就農に対する動機の重要な部分となっている。

就農までの経過を見てみよう。仕事を辞めた33歳の時に、前述した別海町及び浜中町の研修牧場に視察に行く。その際に翌年には就農可能な牧場があるという話を受けたが、同時に妻が本で知っていた中標津町の三友牧場に行きたいということで、そのまま三友牧場に見学に行った。

その後、3回ほど三友牧場にチーズに買いに行くなかで三友氏と出会い、牧場で一人研修の空きがあるので、やってみないかと声をかけられた。その時は放牧に対して強い思いはなく、三友氏に対して認識も特段ないままに、2年間という期限付きの研修をスタートさせた。別海、浜中では研修後終了後に就農できる牧場のめどもついていたが、三友牧場

の場合は、2年の研修後に自分で牧場を探さなければならない状況であった。2年目の秋に、三友氏より就農先を探すための休暇をもらい、その時のアドバイスで道北地域を回るようになった。本人としても、放牧に向いている点、友人がいる、地価が安いなどが魅力と感じていた。

道北を回る際には、ほとんど全ての自治体及び農協に連絡を取り、就農できる牧場を探して回った。名寄市で手頃な牧場があったが、放牧に適さない土地条件だったため断念した。猿払村にもあったが、規模が大きかったため決めかねていた。

そうしたなかで、B町に立ち寄り役場や農協に話をした。地域としては受入体制が整備されておらず就農できそうな牧場もなかったが、地域には新規参入受入にこれから取り組んでいこうという熱意があり、本人も内陸に位置する山がちな地理的条件に魅力を感じ、就農可能な牧場のめどはないがこの地域に移住して研修をすることを決意した。これまで新規参入者がいなかったという点も、これまでの仕事のなかで新たな事業の立ち上げなどを行ってきた自分に向いているのではないかという考えもあった。

そして、三友牧場での研修の2年目の冬にB町での面接を行い、研修を行うことが決まった。3年目の春にB町へ移住し3ヶ月毎に町内の牧場を移りながら実施する計画で2年間の研修を開始した。研修中に一度牧場の売却の話があったが、離農してからすでに3年経過していたため、その年の冬の雪で牛舎が倒壊して話が消えてしまった。

2年目の春になって、現在就農した場所の前経営主が病気で倒れ、牧場を売却するという話が出た。その牧場買取りの話を進めていく過程で、前経営主がなくなってしまった。その後農地の売却の話が進められ、地元の農家にも購入意向があったが、農業委員が地域に新規参入者を入れるというつよい思いを持っていたこともあり、B氏が購入するまで農地を移動させずにいた。

前経営主の妻は、当初牧場から転出せずに家に住み続けたいという意向を持っていたが、地域の人たちが説得をし、また価格交渉も役場、農協が前経営主の妻及び息子と交渉しながら決定されていった。そうして無事にその年の秋にリース事業を利用して牧場を購入したのである。

このようにB氏の就農は、地域が新規参入者を受け入れるという目的のもとで連携して取り組んだ結果実現したのである。

③放牧技術の特徴と技術採用のプロセス

B氏の放牧のスタイルは、研修を行った三友牧場のスタイルを「素直」に踏襲している点が特徴である。

経営主は研修以前に酪農の知識は全くなく、研修中の経験が全ての基礎となっていることから、就農後にそのまま三友氏のスタイルでスタートした。粗飼料としての乾草重視や、配合は少量におさえるという点、放牧期間中牛舎での粗飼料なし、極力経費を抑える、という三友氏の考え方を重要な手本としている。

それは草量のある放牧地とそれを十分に採食できる牛群によって初めて成立する飼養管理方法であるが、そうした点に関する理解も不十分なままで初年度からそのスタイルでスタートした。

前経営主は放牧をしていなかったため、採草地を放牧地とした。放牧地は、牧草の更新時期で大きく三つの植生のことになったエリアに区分できるが、大牧区でスタートした。実際、放牧になれていない牛群のため全ての馴致を終えるまでに放牧開始の5月上旬から6月下旬までかかってしまい、そのため秋には草丈が伸びすぎ採食できない状態となった。初年度の失敗を受けて2年目である2013年は早めに放牧を開始したが、スプリングフラッシュもないほど早めに出し過ぎてしまい、また夏の干ばつもあり放牧草が足りない事態となった。

④組織への参加状況

○フォーマルな組織

農協青年部には参加して定期的に会合に出席している。また、町内の堆肥センター利用者の組合に参加しており、センターのメンバーで実施している牧草の共同収穫作業や新年会などに参加している。

前述した普及センター主催の「SOYA ルーキーカレッジ」には、研修時代から参加してすでに二年のコースを修了しているが、現在もう一度参加して勉強をしている。

また、その他乳業メーカーや農協、乳検組合、農協青年部、家畜保険事務所などが開催する勉強会には積極的に参加している。自分の知識不足を認識しているためもあるが、自分のやり方は他の酪農家とは違うため、通常酪農家の技術を知ることが目的でもある。

○インフォーマルな組織

「もっと北の国から」へは積極的に参加しておりほぼ毎回出席している。

⑤2013年度の営農上の最も重要な課題とそれへの対応

今年の最も重要な課題として上げられたものは干ばつへの対応であった。前述したように今年是非常に早期に放牧を開始した。スプリングフラッシュもわからないほどに短草で維持するスタートとなったが、通常年では夏に雨が降れば草勢が回復するが、今年は干ばつのためにそれがなく放牧草不足となっていた。しかし、草勢が回復するために最低限必要な草高についての知識がなかったため、そのまま放牧を続けてしまった。さらに牛の採食量の観察も十分に出来なかったため、牛舎内でも粗飼料を給与していなかった。

そうしたなかで、偶然に牧場に遊びに来た前述の小泉氏や、「もっと北の国から」に行ったときに話をした石田氏から、粗飼料を給与するように言われて、七月中旬まで草架にロールを置くことで対応した。

その後、兼用地を広げるためになるべく早めに1番草を収穫し、また降雨で草勢が回復したため乳量が復活していった。

来年は放牧専用地を広げ、また草の状態を維持するために3牧区として、採食量の制限と草勢の回復が出来るようなシステムに変更する計画である。

上記のような状況を受けて2013年度は初年度よりも出荷乳量が減少する事態となった。図2は月別出荷乳量を示しているが、放牧酪農で最も乳量が望める6月の乳量が初年度よりも落ち込み、それが全体の乳量の減少となってしまっている。損益分岐点として、一頭あたり5,500kg程度と本人は認識している。黒字とするためにも来年度は一頭あたり

6,000kgの乳量を目指している。

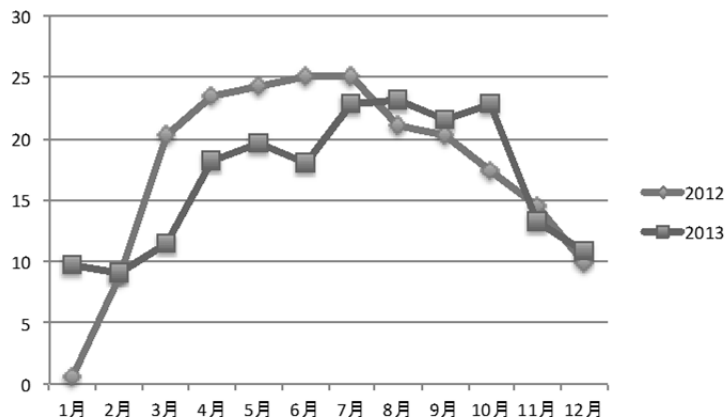


図2 No.2牧場における月別出荷乳量(単位:トン)
資料)農協資料より作成。

⑥経営主が持っているパーソナルネットワーク

○概況と特徴

B氏のパーソナルネットワークを整理したものが表10である。ネットワークは大きく3つに分けられる。ひとつは、No.1～4の放牧酪農家のつながりである。No.1は最初に研修を行った三友氏であり、それ以外は新規参入・放牧酪農家の集まりである「もっと北の国から」によるいわば「放牧・新規参入者」という同質的なネットワークである。No.1は地域的にも離れているが、2～4は同じ道北地域であり、年代的にも比較的近いということからNo.1よりは緊密な関係となっている。つながりとしては、積極的に電話をするというよりも、年に数回開催される交流会で会ったときに聞くという状況である。内容としては、放牧に関する技術的なことなど、酪農についてその時抱える課題や悩みを相談することが多い。

これにくわえて、No.5～10までは現在の就農地であるB町にいる人たちとのネットワークである。つながりの内容をみると、地域と非常に強いつながりを持っていることがわかる。地域で約2年間にわたり研修したため、また受入側としても初めての新規参入者であるため、農協、役場と行った組織とのつながりもフォーマルなつながりというよりは、より親密なつながりとなっている。

また、おなじ集落の酪農家で町内最初の研修先かつ地域の名士でもあるNo.10とのつながりが、地域に根付く重要な入り口(ゲートキーパー)となっているようである。

つながり方の特徴としては、色々な人にすぐ聞くというよりも、自分でやってみて失敗も含めて経験することが重要と考えている。それは個人的な性格の部分もあるが、本人は年齢からくる社会経験も関係しているのではないかと考えている。

支援策として失敗しないためのサポートと言うことももちろん重要だが、失敗のなかから学ぶことも必要だということが本人の認識である。

表10 No.2農家におけるパーソナルネットワーク

番号	年齢	関係(知り合った契機)	会話頻度と方法	つながりの内容	備考
1	70	研修先	交流会などで会ったとき	酪農全般、悩んでいることや営農上の問題	一番最初の研修先。
2	40才代後半	もっと北の国から(主催者)	交流会などで会ったとき、または時々電話することもある	酪農全般、悩んでいることや営農上の問題	
3	33	もっと北の国から(新規参入者)	交流会などで会ったとき	酪農全般、悩んでいることや営農上の問題	
4	36	もっと北の国から(新規参入者)	交流会などで会ったとき	酪農全般、悩んでいることや営農上の問題	
5	50	農協職員	定期的に牧場に巡回に来るのでその時に	飼養管理全般の細かい注意点など	新規参入の担当
6	45	役場職員	不定期に	家族・私生活のこと、地域のことなど。	新規参入の町の受入窓口
7	50	町内酪農家(研修先)	2週間に1回程度、同じ集落なので顔を合わせたときに	機械を貸してもらったり、作業の合間での雑談	町内の研修先
8	60	町内酪農家(研修先)	2週間に1回程度、同じ集落なので顔を合わせたときに	作業の合間や道路で会ったときなどにコメントをもらう。	町内の研修先
9	35	町内酪農家	青年部の集まりなど	同世代のため、家族ぐるみでのつきあい	No.8の婿さん
10	67	町内酪農家(研修先)	不定期、作業の合間などで会うときに	B町の両親のような人、尊敬できる人、地域のことなど。	B町での一番最初の研修生。土地も借りている。

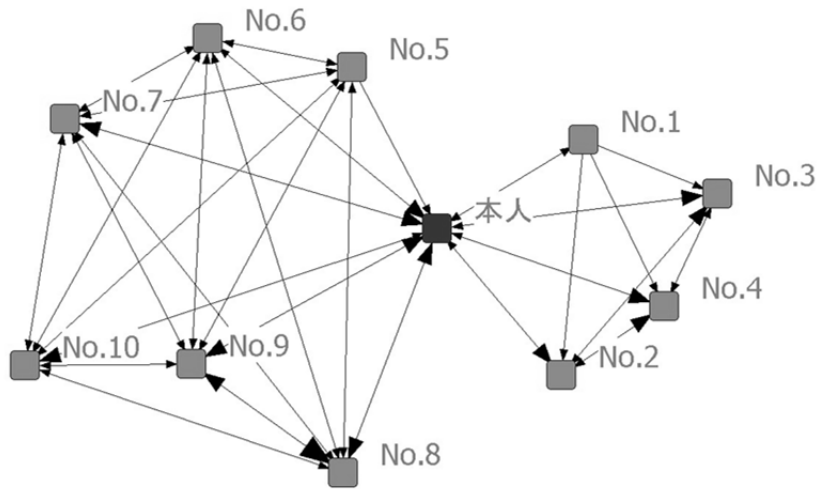


図3 No.2のパーソナルネットワーク

(3) No.3 ～就農5年目のC氏～

①経営概況と地域の特徴(表11)

C氏が就農したC市は、宗谷丘陵に位置する純酪農地帯である。地域の農協は、新規参入者の受入にも熱心な農協である。地域には、C氏以外にも多くの新規参入者が酪農を行っている。

2009年に就農したC氏は、大学卒業から比較的順調に5年という期間で就農をしている。経営は、60haの経営耕地で47頭の経産牛を飼養している。酪農のスタイルとしては基本的には「もっと北の国から」の主催者である石田氏のやり方をまねしたもので、大牧区の定置式放牧である。

表11 No.3農家の経営概況

経営面積 (ha)	自作地	30	年間出荷乳量(トン)	2012年	280		
	借地	30		2013年(予測)	313		
	合計	60		一日あたり乳量(kg)	ピーク(6~7月)	1,400	
土地利用 (ha)	放牧専用地	15	一頭あたり年間乳量	最小	7,000		
	兼用地	8		平均乳成分		乳脂肪	
	採草地	37				タンパク	
飼養頭数	経産牛	47	分娩間隔				
	うち搾乳牛	41		初産月例			
	育成牛	15		平均産次			
牛床	50		飼料給与	舎飼い期	粗飼料	ロールパック	
方式	スタンション			放牧期	配合	TDN?, CP16	3~6kg
放牧時期	1970年代頃				粗飼料	配合	TDN?, CP16
放牧方式	5月中旬~11月上旬		粗飼料		配合	TDN?, CP16	3~6kg
	一牧区・定置式			粗飼料	配合	TDN?, CP16	3~6kg
農場購入価格	8000万円			粗飼料	配合	TDN?, CP16	3~6kg
農場リース事業の利用有無	有り			粗飼料	配合	TDN?, CP16	3~6kg
自治体支援・助成				粗飼料	配合	TDN?, CP16	3~6kg
自己資金	500万円			粗飼料	配合	TDN?, CP16	3~6kg
青年給付金	有り			粗飼料	配合	TDN?, CP16	3~6kg

②就農までの経過

酪農学園大学在学中には就農意向は全くなかったが、四年生の時に足寄の放牧ネットワークに参加したことを契機に自分も酪農が出来るのではないかと思ひ就農を決意した。

足寄町でヘルパーをやりたいと思ひ、十勝のヘルパー組合の合同面接に参加したが、その時に広尾町の小田氏に南十勝に誘われたことで南十勝ヘルパー組合に就職した。南十勝では利用酪農家が300戸以上もありTMRから小規模まで、多様な形態を経験することが出来た。

1年目~2年目は仕事に専念をし、3年目に結婚してそこから本格的に物件を探すようになった。既婚者の方が受入側も真剣な対応をしてくれた。自己資金としては預金が500万円程度あった。物件探しを始めたときに足寄町の交流会で石田氏に出会い、本人はある程度自己資金を積んでから物件を探すことを考えていたが、探すならば早いほうが良いとアドバイスを受けた。交流会において宗谷支庁にいい物件があるという情報を入手して、現在の地区に来ることになった。

その時に紹介された物件は、面積も広く牛舎も新築だったが、自分の希望よりも規模が大きすぎるために躊躇していた。その時同時に近隣の町村4カ所を見学した。

現在の就農した牧場は、前経営主が病気で辞めてから一年がたっていた。牛舎は古く、4、5年前に雪で倒壊したところを補強していた。機械類(中身)についてはパイプライン以外はなかった。面積も小さく、物件としては牛舎とD型倉庫、堆肥舎のみだったが、その分購入価格も1,000万円と安かった。また、住宅が新しいということもあって決断をした。売り手としても、すでに離農し家の維持管理も大変なため早く売却したいという意向であった。機械一式はリース事業に載せ、そのほかにも自己資金で機械を購入している。

購入を決めてから、農協、役場のすすめで、売り手の妻の親戚の牧場で1年間研修をすることになった。その間、青年給付金を1年間受給していた。研修は、リースに乗せるためにも準備が必要ということ、さらには地域になじむためにも、必要だったと認識してい

る。住宅は、現在の所にすでに住みながら実習していた。

③放牧技術の特徴と技術採用のプロセス

放牧のやり方は基本的には石田氏を見本にしている。就農当初から1牧区で、配合も通年で同じものを給与している。最初の年は、心配で牛舎内でも粗飼料を給与していたため放牧地の草が余った。2年目、3年目は夏の間には、牛舎内では粗飼料を一切給与しないやり方をとったため、放牧草の採食量は増えたが、3年目には草勢が後退してしまった。過放牧に対応するために、3年目の夏には生ゴミ由来のバイオガスプラントのコンポストを施用している。

2013年は干ばつもあり、過放牧により植生が後退してしまった。育成も同じ所に出しているので育成の採食量も低下してしまっている。

また、1年目に放牧地6haを更新した。草のことはよくわからなかったが、実習先農家や農協の助言で実施した。

④組織への参加状況（2013年の実績）

○フォーマルな組織

農協青年部には、支所の役員のため役員会には出席している。青年部の勉強会は、本に乗っているような内容が多いためあまり参加しない。それよりも、実践している人、や興味があることを話してくれる機会には参加するようにしている。その一つとして、「天北放牧ネット」のセミナーなどがある。また、話を聞いて影響されすぎて自分のやることがぶれるとことにたいしても警戒感がある。

地区には放牧の会があり年3回集まりがある。3月は勉強会、春には持ち回りで会員1名の牧場を視察、9月には管外研修をおこなっている。会の事務局は普及所で企画は事務局と役員で決める。

○インフォーマルな組織

「もっと北の国から」には、毎年1~2回集まりがあり参加している。「天北放牧ネット」のセミナーは秋にやることが多く、近場で開催のときには極力参加している。

妻は農協の管内の道外出身の農家女性の集まりに参加している。親睦組織であり新規就農の妻も多くいる。

また、C氏主催で近隣の方を集めて食事会・バーベキューなどをしている。沼川地域の人とは年1回くらいバーベキューする。自分より後に新規参入したひとは、オードブルを買って持って行って食事会をしたこともある。

⑤2013年度の営農上の最も重要な課題とそれへの対応

今年の最も重要な課題は、低酸度、アルコール不安定乳が発生したことである。去年の秋に「もっと北の国から」で三友氏が近くに来たときに牧場に来てもらった。そのときに放牧圧が高すぎると指摘されたため、今年からは軽めに放牧しようと考え、6月には牧草を購入する計画であった。就農時に5年後に農地がでて、それを購入することになったため、5年間は何とか現状の面積で対応しようと考えていた。

しかし、7月から干ばつで、放牧草が足りない状況で、牛舎内で三番草を給与していたが、低酸度乳がでてバルク乳を捨てることとなった。すぐ石田氏に電話したところ足寄町でも同じような事象が発生し、粗飼料不足が原因だったという情報を持っていたため、それを聞いて収穫したばかりの1番草を少しだけ給与した。牧草が足りなくなったら困るため症状が回復してからは2番草にきりかえた。その後兼用地も出て来て雨も降ったため状況は回復した。

⑥経営主が持っているパーソナルネットワーク

○概況と特徴

C氏のネットワークの概況をみると(表12)、最も重要な人物として最初にあげられたのが、「もっと北の国から」の主催者であるNo.1であり、主に電話で技術的なことを教えてもらうという関係である。ついで同じ地域で放牧酪農を実践しているNo.2農家である。3番目には、No.1が実習を受けていたベテランの放牧酪農家である。このようにいずれも放牧酪農家がネットワークとしてあげられている。

放牧技術としては、就農に至る経過の影響もあり自主的グループの主催者であるNo.1が中心であり、わからないことがあれば、積極的に電話などをして聞いている。前述した、低酸度乳への対応についての情報もNo.1から得たものであり、情報のハブとしての機能を果たしている。

一方で、地域にあった技術という意味では、地域で放牧をしている既存農家であるNo.2農家から、電話や何かの機会に会ったときに積極的に情報を集めている。No.2農家とのつながりは、地域との接点としても重要な意味を持っている。そこでのつながりから様々な地域の行事への参加も果たしている。

また、本人の認識には現れていないが、いわば後輩の面倒をみるというような立場で、近所にいる四名の新規参入者を招いたBBQ等を時々実施している。前述したNo.1農家とは先輩としての立場のネットワークと共に、おもに妻同士のつながりがある。

新規参入5年目になり地域にも新たな参入者が地域に入ってきているなかで、そうした人たちへのアドバイザーとしてのつながりもできはじめていると言うことが大きな特徴である。

表12 No.3農家のパーソナルネットワーク

番号	年齢	関係(知り合った契機)	会話頻度と方法	つながりの内容
1	40才代 後半	もっと北の国から(主催者)	交流会の時や電話をして	放牧に関してわからないこと全般
2	50才代	同じ集落の酪農家	同じ地域なのであったときや電話をして	地域の放牧の勉強会の会長。放牧技術のなかでも特に地域性について
3	50才代	町内酪農家(No.1の本実習先)	何かの機会であったときに	酪農技術全般など

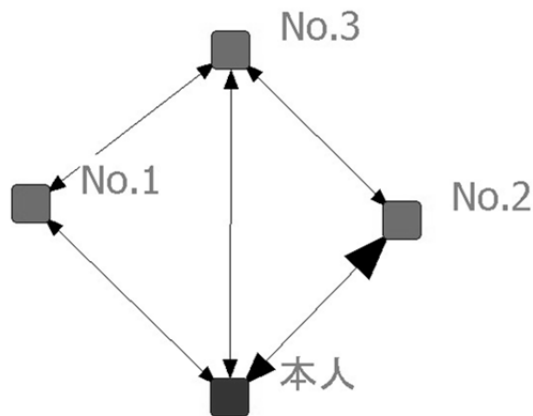


図4 No. 3のパーソナルネットワーク

(4) No. 4 ～就農6年目のD氏～

①経営概況と地域の特徴(表13)

D氏の就農しているD町は、町全体の酪農家戸数が27戸にまで減少し、地域は今後の存続に対して強い危機感を有している。町はこれまでも複数名の新規参入者を受け入れてきたが、その定着率は高くはない。就農後の町の支援期間が終わり、機械の更新を迎える10年目ぐらいでの離農がこれまでに5戸程度みられている。

経営主のD氏は現在37才で就農までに12年を要したという経歴を持っている。研修期間中にさまざまな研修会などで道内各地の放牧酪農家とつながりをつくってきた。

現在の牧場についても、就農後に目標とする牧場像を頭に描きながら選定を行い、実際にそれに即した経営展開を行っている。牛舎周りに放牧適地が41haもあるという好条件に有り、牛舎は前経営主がFS、オートタンデムパーラーを整備していたため、非常に良い設備となっている。研修期間中に得た知識と経験を最大限活用し、堅実な酪農経営を展開させている。

表13 No.4農家の経営概況

経営面積 (ha)	自作地	45	年間出荷乳量(トン)	2012年	324		
	借地	0		2013年(予測)	320		
	合計	45		一日あたり乳量(kg)	ピーク(5~7月)	1,260	
土地利用 (ha)	放牧専用	23	一頭あたり年間乳量	最小(11月)	480		
	兼用地	18		平均乳成分	乳脂肪	7,200	
	採草地	4			タンパク		
飼養頭数	経産牛	37	分娩間隔				
	うち搾乳牛	10		初産月例			
	育成牛	15		平均産次数			
牛床		70	飼料給与	舎飼い期	粗飼料 配合 TDN75, CP16	デントコーン・ロールパック	4.4kg
方式	フリーストール					ビートバルブ	なし
放牧時期	2000年頃 5月中旬~10月末					その他	なし
放牧方式	6~9牧区			放牧期	粗飼料 配合 TDN78, CP9	ロールパック(一番)	3.4kg
農場購入価格	6800万円					ビートバルブ	なし
農場リース事業の利用有無	有り					その他	なし
自治体支援・助成	800万円						
	リース料半額補助、 固定資産税免除						
自己資金	220万円						
青年給付金	なし						

②就農までの経過

D氏が就農するまでに要した12年間というのは、一般的に就農までの年数が長い酪農のなかでも、その長さは際だっている。そして、研修期間の長さとしてそこで得た経験が現在の酪農経営に大きな影響を与えており、新規参入者でありながら非常に計画的で確実な酪農経営を確立している。東京の大学に在学中四年生の時に、このまま就職するという気になれず自営業がしたいと考えていた。卒業後1年半は無職でいたが、自営業の一つとして酪農が出来るのではないかとおもい、首都圏の担い手センターを訪れ、その紹介で訓子府町の牧場に実習に入った。自分に合わなければ辞めれば良いと考えていたが、実習中に参加した勉強会でH町放牧酪農家であるH氏の事例を知り、自分の目指していた方向がこれだと思い、H町を訪れることになった。

訓子府町での1年間の実習終了後には酪農について勉強するために神奈川県立農業アカデミーの酪農コースを受講した。その後東京の池袋で開催された農業人フェア経由で池田牧場での研修を開始した。実習を通じて、作業がシンプルで経済的にも時間的にもゆとりがある生活が送れるという実感を得た。

その後、結婚相手も見つかりH町での就農を期待して同町の新規参入希望者向けの実習を行う「楽農塾」の第1期生として町内での研修を開始した。2~3ヶ月毎に町内の牧場を回りながら研修をしていたが、その後酪農ヘルパーの方が資金を貯められると言うことで、ヘルパー組合に入り2年半の間就農のチャンスを待っていた。

しかし過程で、パートナーだった女性が就農を断念してしまった。本人は再び研修に専念し、さらに2年半(月収は6,000円/日×25日)での生活をしているなかで新しいパートナーも見つかり、さらに牧場もみつきり就農直前まで話しがすすんだ。しかし、譲渡予定だった経営主が急遽もう少し営農を継続するという話になり、もうこれ以上この地域に入られないということで、道北の別の就農先を探すため町を離れた。

そして、道北地域の自治体、農協に電話をして就農先を探し、視察するなかで、D町で

離農予定の牧場を購入できるという話になった。

その際には、金額面、売り主が売却後は家を出るなどの点を役場や農協を通じて確約してもらい、ついに現在の牧場に就農することとなったのである。酪農を始めようとしたときからすでに12年の月日がたっていた。

③放牧技術の特徴と技術採用のプロセス

牛舎周りに放牧地が広くあるというレイアウトの関係から、6～8牧区での放牧となっている。放牧可能な土地は可能な限り放牧をするという考え方から、兼用地も少ないためにロールの購入を行っている。また、2013年からデントコーンも購入して舎飼い期の粗飼料としている。

配合飼料の給与量については、就農当初の6kg/日/頭程度から徐々に削減しながら現在のようになっている。配合飼料は、糞の状態を見ながら自分で判断して減らしてきた。また、今年の干ばつ時期については、夜間放牧にして昼間は牛舎で粗飼料を給与するなどの合理的な判断に基づいた営農をおこなっている。

飼養管理の特徴としては、放牧農家に多い春産みの季節分娩を目指すのではなく、秋産みを目指している点にある。10～12月に生まれたメスを8頭残して、それをベースに群管理する考え方である。秋産みの場合泌乳初期を舎飼いでしっかり管理して、乳量が落ちてきた頃に春の放牧草につけることが、再び乳量が回復するために泌乳曲線のピークが2つになるようなイメージをもっている。実際の月別乳量を示したのが図5であるが、3月頃にも高い乳量を実現していることがわかる。また、作業的にも夏は牧草関連、冬は繁殖・ほ乳というように労働を分散できることが良いと認識している。

繁殖については、秋分娩になる時期以外の牛については黒毛を種付けし、F1の初生牛で販売をしている。そうした仔牛販売額も重要な収入となっており2012年度で2,267千円の売上げであった。

放牧地での牛の採食量をしっかり把握して、それに併せて牛舎内でロールを給与するというように管理している。

また、牧区の管理についても、草高20センチで入牧し5センチまで採食させるというのが基本ではあるが、他の牧区の伸び具合も見ながら、放牧草全体の草量を維持するために牛舎内での粗飼料給与量をコントロールしている。

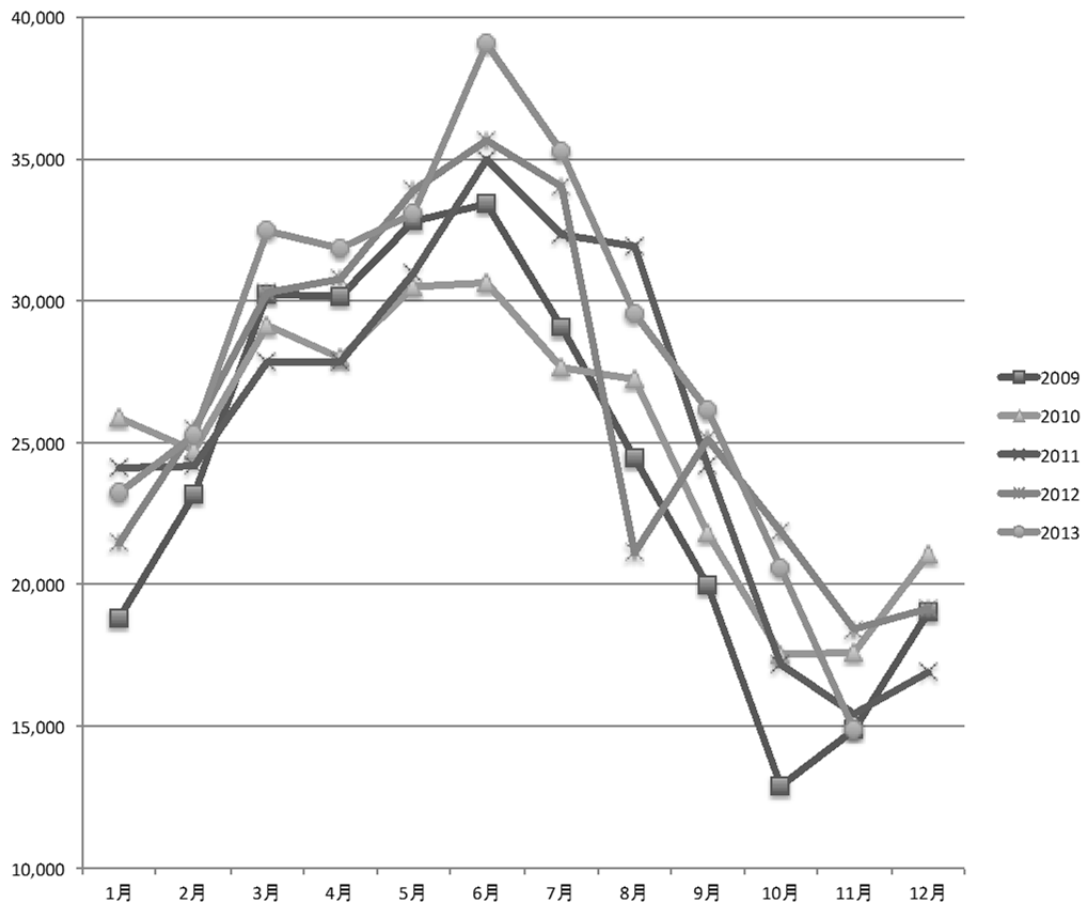


図5 No.4農家における月別出荷乳量の推移(単位:kg)

④組織への参加状況

○フォーマルな組織

農協青年部には2008年の就農時点から加入し、現在は役員(監査)になっている。また、農協のホルスタイン改良協議会にも2010年から参加しているが、これは周りから誘われたため、あまり興味はないが参加しているという状況である。その他、4Hクラブや普及センターが組織する勉強会には参加しておらず、それよりも後述する任意の組織での活動が活発となっている。

○インフォーマルな組織

インフォーマルな組織としては自らが2012年に立ち上げた「I」という組織での活動を積極的に行っている。現在地域全体の酪農家戸数が減少していく中で、自らの経営を確立したとしてもそれが寄って立つ地域が存続できなければ自らの経営も存続し得ない。周りの人に恩返しをしたいという考えから、これからの地域の酪農の担い手である後継者と技術の相互研鑽するために組織したものである。そのため放牧のみが対象ではなく、各自の飼養形態での技術向上が目的となっている。

メンバーは本人を含めて4名であり、いずれも26~33才と若く、既存農家の後継者が中

心である。牛道整備についての勉強をきっかけとして、その後広く土作りをテーマとした勉強会やフィールド研修を行っている。

牛道については、置戸町が製作している木製のこを参考にして、D 町の間伐材を使用して作成し、牛道の下地として利用している。こうした取り組みは町の産業振興課および酪農課の職員との協力関係で進められていった。

フィールド研修の一環として「もっと北国から」への参加や十勝地域の放牧酪農家の交流会への参加もおこなっている。

また、前述の牛道整備の取り組みに見られたように、D 氏が役場とうまく連携しながら取り組みを進められた背景に、D 町にある任意団体「J」の存在が上げられる。すでに 20 年以上の歴史をもった組織であり、農業関係者の交流を目的として設立された組織である。廃校となった小学校を活動場所にしながら、農業者を中心に、農協職員、役場職員、獣医師、酪農ヘルパー、乳検組合職員などが、年に数回さまざまな活動をおこなっている。活動は、新年会、花見、BBQ、パークゴルフ大会、忘年会、地域や近隣の町のお祭りへの参加など多様である。現在メンバー数は 35 名であり、家族も含めると大規模な集まりとなっている。こうした活動を通じて、地域の人たちが「腹を割って話し合える」関係づくりができあがっているのである。D 氏は来年に会長になることになっている。

⑤2013 年度の営農上の最も重要な課題とそれへの対応

2013 年は、配合飼料給与量の削減が最も重要な課題であったと認識している。就農時の一頭あたり 1 日 6kg から、2012 年は 5.4kg にしていたが今年は 4.4kg へと削減した。

去年から糞を観察しているなかで配合が消化されずに排出されていたのをみていたためである。実際に削減に踏み切ったのは、ある牧場を視察した際に放牧草とデントコーン 10kg/日/頭および配合 2kg/日/kg で飼養している事例を目の当たりにしたことも要因である。

単に配合飼料のみを減らしたのではなく、その前提条件として放牧地を含めた草地改良（土壌改良及びペレニアルライグラスの追播や暗渠の施行）や今年から草地更新していた兼用地 15ha も増えるということがあげられる。このように、今年の新たな取り組みの背景には就農時点からの草づくり、放牧地の改良の取り組みがある。草地改良にはこれまでも石灰や追播の種子代として 1,000 万円以上を投資し、さらに暗渠にも 2012 年に 500 万円の支出を行っている。草地改良の取り組みは、実習先の一つであった牧場での経験が非常に大きく活かされていると本人は認識している。

土作りと飼料費の削減の結果として、本人としては「乳代-飼料費」は過去 3 年で確実に増加していると感じている。実際に経営収支を整理した表 14 をみると「乳代-飼料費」は過去 4 年間の間に 300 万円ほど増加している。これは、飼料費は増加していく中で乳代がそれ以上増加していることによる。

表14 No.4農家の経営収支の推移(単位:円)

		2009	2010	2011	2012
収入	生乳	21,430,889	22,512,400	23,413,285	25,138,305
	補給金	1,361,677	1,482,107	1,455,054	1,440,357
	乳用牛	558,000	1,519,790	2,202,870	783,960
	肉用牛	1,128,000	789,000	1,933,000	2,267,000
	畜産収入合計	24,630,389	26,511,559	29,232,258	29,833,572
合計		31,351,723	38,290,870	40,746,334	49,000,100
支出	飼料費	4,404,189	5,275,732	5,687,330	7,580,318
	乳牛配合飼料	2,421,825	2,756,779	2,198,383	3,262,761
	肉牛配合飼料	41,444	95,288	199,272	318,368
	ビートバルブ	295,902	1,220,498	2,271,074	598,350
	乾草	0	78,750	267,000	2,384,957
	その他	1,645,018	1,124,417	751,601	1,015,882
	合計	28,407,886	33,506,680	32,191,092	43,315,130
乳代(補給金込み)-乳牛配合飼料		20,370,741	21,237,728	22,669,956	23,315,901
乳飼比(%)		11.9	16.9	19.0	23.5

資料)農協クミカン資料より作成。

⑥経営主が持っているパーソナルネットワーク

○概況と特徴

D氏が重要と考えているネットワークは表15のようになった。これをみると、No.1～6までは放牧酪農家として道内でも名の知れた中堅ベテランに属する人物があげられる点特徴的である。北海道の放牧酪農に大きな影響を与えてきた人物をみずからが影響を受けた人物としてあげており、日常的な情報交換というよりもメンタリングでいう「挑戦的な仕事の提供」や「役割モデル」としての、いわば刺激を受ける関係である。

また、自分よりも年少の放牧酪農を行っている酪農家も3名あげている。No.7農家などは、新たな地域の放牧に関する自主的なネットワークグループとして発展する可能性を有している。

また、特定個人ではなく前述したインフォーマルな組織(No.10、No.11)を重要なネットワークとして上げている点も特徴であり、それらが地域の「ゲートキーパー」としての機能を果たしている。

D氏は実習期間を通じて得た知識、経験をふまえて、就農当初から目指す酪農像が明確であった。従って就農後もすでにもっている知識やつながりの中で営農を開始している。そのため、就農後のネットワークは、具体的課題を解決するための実践的で仲間作りのようなものはみられない。むしろ、役割モデルというような酪農家がネットワークとして上げられ、そこから刺激を受けるという意味で重要と考えている。

その一方で、昨年からは始めた活動に見られるように自分の経験を伝えるためのネットワークが形成されつつあり、No.7～9もそうした位置づけにあるといえよう。地域の人たちを「つなぐ」ためのハブとしての役割を自覚して、それを組織化しようとしているのである。

表15 No.4農家のパーソナルネットワーク

番号	年齢	関係(知り合った契機)	会話頻度と方法	つながりの内容
1	40才代	放牧酪農家(酪農ヘルパー時代の見学会)	研修会などの機会であったときに	酪農全般のこと
2	60才代	放牧酪農家(酪農ヘルパー時代の見学会)	研修会などの機会であったときに	酪農全般のこと
3	70才	放牧酪農家(酪農ヘルパー時代の見学会)	研修会などの機会であったときに	酪農全般のこと
4	50才代	放牧酪農家(酪農ヘルパー時代の見学会)	研修会などの機会であったときに	酪農全般のこと
5	70才代	放牧酪農家(酪農ヘルパー時代の見学会)	研修会などの機会であったときに	酪農全般のこと
6	70才代	実習先農家	研修会などの機会であったときに	酪農全般のこと
7	30才代	実習先農家(No.6)の息子	メールやSNSなどで連絡を取り合う	酪農全般のこと
8	30才代	放牧酪農家で研修会にて	研修会などの機会であったときに	酪農全般のこと
9	30才代	近隣の放牧酪農家でNo.7がつれて家に見学に来た	研修会などの機会であったときに	酪農全般のこと
10		I		
11		J		

注) I および J については本文中を参照のこと

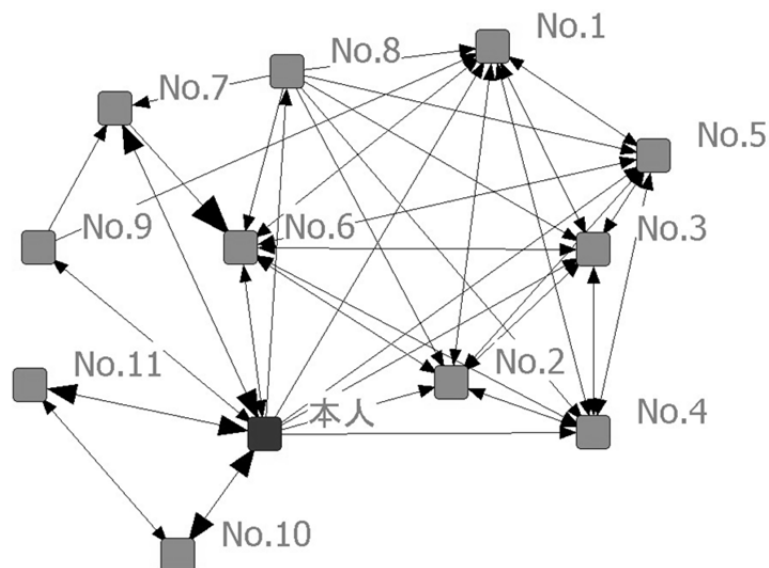


図6 No.4のパーソナルネットワーク

(5) No.5 ～就農6年目のE氏～

①経営概況と地域の特徴(表16)

E氏は、2008年5月に農場リース事業によってE町に就農した現在36才の新規参入者である。家族は妻(36才)と子供が3人おり、農業労働力としては経営主と妻の2人とな

っている。総面積 62ha（放牧専用地 20ha、兼用地 30ha、採草専用地 17ha）に経産牛 49 頭を飼養し、年間 420 トン程度の出荷乳量となっている。一頭あたりの乳量は約 9,000kg となっており、放牧酪農としては高い。その理由は、経営当初からある程度の所得を確保するために、配合飼料も給与しながら放牧を行うというスタイルをとってきたためである。

今後については、配合飼料給与量を削減しながら、放牧草への依存度を高めることを目標としている。また、今後子供が大きくなり生活費も必要になることから、54 頭牛舎いっぱいまで搾乳業頭数を増やすため育成舎を建設することになっている。

表16 No.5農家の経営概況

経営面積 (ha)	自作地	62	年間出荷乳量(トン)	2012年	420	
	借地	5		2013年(予測)	430	
	合計	67	一日あたり乳量 (kg)	ピーク(5~6月)	1,500	
土地利用 (ha)	放牧専用地	20		最小(1~2月)	1,200	
	兼用地	30	一頭あたり年間乳量	9,000		
	採草地	17	平均乳成分	乳脂肪 3.78~4.02 タンパク 3.37~3.39		
飼養頭数	経産牛	49	分娩間隔	440		
	うち搾乳牛	10		初産月例	23ヶ月	
	育成牛	18			平均産次数	3産
牛床		54	飼料給与	舎飼い期	粗飼料	ロールバック
方式	ニューヨークタイストール			配合	TDN?, CP18	6kg
放牧時期	5月20日~11月3日			ビートパルプ		2kg
放牧方式	1牧区		その他	ルーサン	時々	
農場購入価格	5,500万円		放牧期	粗飼料	ロールバックを3日で一つ	
農場リース事業の利用有無	有り			配合	TDN?, CP16	4kg
自治体支援・助成	なし			ビートパルプ		2kg
自己資金				その他	コーン	2kg
青年給付金	なし					

②就農までの経過

本人は玉川大学を 2001 年に卒業後、島根の酪農法人で 3 年勤務した。そのときに現在の妻と知り合い、酪農で新規参入することを考えるようになった。実習期間中は、給餌・除糞・簡単な機械作業を経験し、その後北海道での研修をするため大阪にある就農担い手センターの支局を訪ねに行った。勤務先の先輩から三友氏のマイペース酪農の本を紹介されて、これなら自分たちでもできるとおもしろい、放牧酪農農家のいる北海道での就農を考えた。

2004 年に島根の酪農法人を退職し担い手センターの紹介で E 町に実習に入った。2004 年 5 月から、担い手センター等を通じて紹介された新規参入者を尋ねるために道内をまわりながら三友氏や石田氏らとも知り合った。当初、別の町での就農を希望していたが牧場がないため断念した。その際に担い手センターからは道北での就農を勧めら、当時唯一知っていた地名であった E 町を紹介してもらい、農協の取り次ぎによって、就農物件は未定のまま、地域実習を開始した。

約半年後に実習先の農家と折りが合いが悪くなって実習先を変更し、町内の別の牧場にて 3 年間ほどの実習を行った。この牧場は当時経産牛 120 頭程度のフリーストールの経営であった。

給料は当初 10 万円だったが、子どもが産まれたため 20 万円に値上げしてくれた。実習中は町の補助はなかった。当初の実習期間は 2 年となっていたが、就農できそうな農地が

なく 2 年目を過ぎた。その後実習先の経営主より、もう一年の間に就農先を確保するので頑張ってもらいたいと頼まれたため 3 年目の実習に入った。そして 3 年目の終りの 2007 年となり町と合併し、農協同士の合併も時間の問題とされていた。これにより、となり町の牧場で実習なしで就農できる約束を取り付けた。

しかし、2007 年は農場リース事業の予算が足りなかったため、もう 1 年実習を継続して 2008 年 5 月に就農した。前所有者が 5 月まで搾りたいという意向を尊重した結果である。

③放牧技術の特徴と技術採用のプロセス

放牧酪農としては購入飼料の給与量が比較的多く、一頭あたり乳量の高い点が E 牧場の特徴である。これは、就農初年度に牛の状態が悪くなった際に近隣の放牧酪農家に相談したところ、農協に相談した方がよいといわれ、その相談結果として、配合飼料の給与量を増やようアドバイスされたことが契機であった。就農から現在までの生産及び飼料給与の変遷を整理した表 17 からも、就農後から配合飼料を 10kg/頭/日程度給与してきたことがわかる。

相談を受けた近隣の放牧酪農家は、配合飼料の給与量を削減した飼養方式にこだわるよりも、新規参入者としては農協との関係も重要だという判断でこうしたアドバイスしたということである。

放牧地の利用方式としては、就農当初は中牧区（3 牧区）での輪換放牧を行っていた。放牧地の草種に違いがあったため、それらをうまく採食させるためには牧区を区切った方がよいと考えていたためである。しかし、3 年目に子供が生まれ、夏場の作業時間がとれなくなっただけで大牧区に変更している。

季節分娩については、初産については 10 月分娩を目標としており、秋分娩にして牛舎内でしっかりと配合飼料を給与しながら乳量を絞る、その後放牧で泌乳期のピークを伸ばそうという狙いをもっており、前述の D 氏と同様な考え方である。実際には初産で秋分娩になった後は、徐々に分娩時期がずれ込んでしまっている状況にあるが、それについては「とまらないのはしかたない」として、気にしていないということである。

表17 No.5農家における生産及び飼料給与の変遷

			2008	2009	2010	2011	2012	2013
経産牛頭数	頭	A	40	42	42	49	50	48
出荷乳量	トン	B	81	304	360	380	420	430
B/A	kg/頭			7,238	8,571	7,755	8,400	8,958
飼料給与 (一頭あたり1日 給与量)	舎飼期	配合 ビートパルプ その他	CP18を4kgか ら8kgに 2kg コーン2kg	CP18を10kg なし なし	CP18を8kg なし コーン2kg	CP18を8kg なし コーン2kg ルーサン	CP18を8kg なし コーン2kg ルーサン	CP18を8kg、 秋からは6kg 2kg
	放牧期	配合 ビートパルプ その他		CP16を6kg 2kg コーン2kg	CP16を4kg 2kg コーン2kg	CP16を4kg 2kg コーン2kg	CP16を4kg 2kg コーン2kg	CP16を4kg 2kg コーン2kg
その他			タンパク不足 となり、近隣農 家のアドバイ スをうけて農 協に相談し た。	舎飼期は農 協職員のアド バイスで配合 を増加、放牧 期は近隣農家 に聞いた上で 自分で考え て。	放牧期は、近 隣酪農家から 最も効率的だ と聞いた割合 にするため配 合を2kg減			コーン価格が 上がり、同じエ ネルギー源な らばビートパ ルプの方が安 いため、自分 で判断した が、業者が間違 って飼料タン クに入れた、とい うこともきっか け

資料)聞き取り調査より作成。

④組織への参加状況

○フォーマルな組織

集落にある青年部に参加している。これは地域の飲み仲間や幼馴染のあつまりで、現在8名がいる。農協の酪農振興会は15戸があり、これには参加している。農協青年部には仕事が忙しく入りそびれている。地区の消防隊には5年ほど前から加入している。

酪農研修関係としては、前述のSOYAルーキーズカレッジに参加している。2年間のプログラムを一度は卒業したが、興味のある講義内容のときだけ受講している。

○インフォーマルな組織

「もっと北の国から」は、同町で開催されることが多いため参加することはあるが、最近では忙しく参加していない。一方、妻は同じ新規参入者の女性も多く集まるため、積極的に参加している。

⑤2013年度の営農上の最も重要な課題とそれへの対応

本年度の経営上の最も重要な課題として認識していたのが、乾乳期の飼養管理であった。実際に今年の春から夏にかけての分娩事故で4頭を廃用にした。その後普及センター主催のセミナーでの勉強を踏まえて、乾乳期の飼料給与を変更している。

また、就農6年目となり入植時に初産で導入した牛群がそろそろ更新の時期(6産)を迎えており、いかにしてスムーズに更新を進めていくのか、という点を課題として認識している。

現在は育成牛舎も新築して、牛床一杯まで搾乳牛を増やしたい計画であり、そのためにも育成牛の管理、乾乳時期の管理に現在は注意を払っている。育成牛舎の新築については、

経営主は新築か、改修かでかなり悩んだそうである。最終的には、町営牧場への預託と育成舎建設との費用面からの比較検討と、自分たちで子牛を管理したいということから、新築することに決断をしている。スーパーL資金で1,000万円を借り入れた（10年返済、総額1123万5000円）。最終的には、後述するNo.1農家（元実習先農家）に相談をして実行を後押ししてもらっている。

⑥経営主が持っているパーソナルネットワーク

○概況と特徴

E氏のパーソナルネットワークを整理したものが表18である。就農までの経過を踏まえて、ネットワークとしては酪農全般のこと、さらには「保証人」といういわば地域とのつながり役としての実習先の酪農家（No.1）が第一にあげられている。酪農全般について聞きに行くことが多く、育成舎の立て直しの相談もしている。電話より会いに行くことが多い。また、「組勤」の保証人になってもらっているという関係にもある。

ついで、地域の顔役としてのNo.2農家をあげている。就農地の自治会長であり、地域のきめごとを教えてくれたり、面倒を見てくれる。入植してから知り合い、消防団（農家のみ）やNo.2の声かけで年に3～4回開催される飲み会などで交流している。また、野菜のお裾分けをもらったり、またはあげたりという生活に密着した関係となっている。

放牧に関してのネットワークとしては、現状として放牧依存度の高い飼養方式となっていないこともあり、あまり重要視されていないようである。「もっと北の国から」主催者のNo.3農家との交流も、それほど積極的というわけではない。今後、配合飼料の給与料を削減していく中で、放牧技術のことでいろいろと課題が発生したときには、「もっと北の国から」のつながりが活性化していくことが予想される。

他の事例とは異なり、農協職員の名前が挙げられている点も特徴である。就農直後に飼養管理で課題を抱えた際に、それを乗り切るための農協に相談をした（リース事業をやっていることも大きな要因）ことが、ネットワークのきっかけである。それがその後の飼養方式に大きな影響を及ぼしている。地域にあるネットワークが、放牧を目標とした新規参入者の経営方式にも影響を及ぼしている。

以上をまとめると、No.1、No.2はゲートキーパーおよびメンターとしての機能である。また、放牧の自主的グループとの関わりは、就農後の経過から薄くなっていることが指摘できる。実際に営農が忙しく、交流会にもあまり参加できていない状況となっている。一方で、No.5、No.6というフォーマルな関係が酪農全般についての情報源となっている。

表18 No.5農家におけるパーソナルネットワーク

番号	年齢	関係(知り合った契機)	会話頻度と方法	つながりの内容
1	49	E町での実習先	年に1回はかならず(保証人の関係)。電話もするが直接会いに行くことがおおい。	牛全般のことなら何でも。
2	58	同じ集落の自治会長	消防団、自治会、酪農振興会、飲み会(No.2が主催)などの機会に会ったとき	地域での生活のこと全般
3	40才代後半	もっと北の国から(主催者)		放牧関係のこと全般。妻はよく「もっと北の国から」に参加している
4	40才代後半	もっと北の国から(同町)		地域での集まる機会、「もっと北の国から」の研修会など
5	40才代	農協職員	リース期間中なので、定期的に見に来てくれる。	酪農全般のこと。
6	40才代	農協職員	リース期間中なので、定期的に見に来てくれる。	酪農全般のこと。

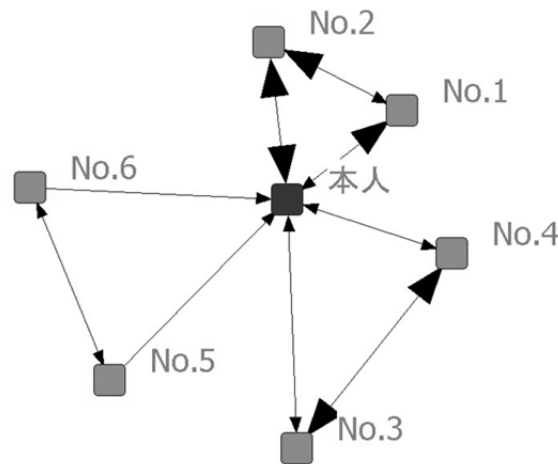


図7 No.5のパーソナルネットワーク

(6) No.6 ～就農8年目のF氏～

①経営概況と地域の特徴(表19)

F氏は2004年から現就農地で居抜き就農に向けた研修を開始し、2006年11月に経営移譲を受けた33才の経営主と、妻35才、子供3人の家族経営である。酪農従事は経営主のみであり、妻は子育てに専念をしている。経営は総面積80ha(うち放牧専用地30ha、兼用地30ha、採草専用地20ha)、経産牛で30頭、育成が10頭、それに加えてホルスタインとブラウンスイスのF1を肉用として1頭肥育している。

夏期は放牧主体にし、実習先だった三友牧場を参考にしながらも地域の条件に合った「粗放的」な放牧を目指している。近年では、ホルスタインとブラウンスイスのF1を比較して、趣味もかねて赤身肉の生産に関心を持っており、いずれ販売にもつなげたいと考えている。

2013年3月からはWWOOF(World Wide Opportunities on Organic Farming)のホストとしても活動を開始し、11名を海外から受け入れている。

また、F氏の就農しているF町のF地区は、古くから山村留学に取り組み、都市部からの移住者（非農家）も多いという地域であり、それらの人たちとのつながりも経営に影響を与えている。F地区では戸数が34件で住民は約70人である。部落の集まりは多くあり、学校の行事と地区の行事がほぼ重なって行われている。学校の文化祭は地域総出でおこなっている。地域住民としては学校教師と山村留学中の親子、山村留学などで地域を気に入って入植した方がほとんどである。農家は既存3件、移住6件となっている。地域の行事では忘年会・新年会も開催されている。

表19 No.6農家の経営概況

経営面積 (ha)	自作地	80	年間出荷乳量(トン)	2012年	170			
	借地	0		2013年(予測)	160			
	合計	80	一日あたり乳量(kg)	ピーク(5~6月)				
土地利用 (ha)	放牧専用	30		最小(1~2月)				
	兼用地	30	一頭あたり年間乳量	5,300				
	採草地	20	平均乳成分	乳脂肪 タンパク				
飼養頭数	経産牛	30	分娩間隔	540				
	うち搾乳牛	30	初産月例					
	育成牛	10	平均産次数	4~5				
	(経産牛のうちブラウンスイスF1が1頭、ジャージーのF2が1頭)							
牛床 方式	チェーンストール	54	飼料給与	舎飼い期	粗飼料 配合	TDN74~75, CP16	乾草	0~4kg
				放牧期	粗飼料 配合	TDN?, CP9	なし	なし
放牧時期	5月中旬~10月下旬			その他	なし			
放牧方式	3牧区			その他	なし			
農場購入価格	4,800万円							
農場リース事業の利用有無	有り							
自治体支援・助成	なし							
自己資金								
青年給付金	なし							

②就農までの経過

帯広畜産大学出身で、妻が同大学の一学年上におり新規参入の意向を強く持っていた。そして妻がK町のK牧場で研修をしていた際に、視察で訪問した三友牧場で三友氏の書籍を購入した。それを渡された当時4年生のF氏は「これだ」、ということで就農を決意し、卒業後に三友牧場で実習をスタートさせた。

そこで2年の実習をしたが、2年目に三友氏がF町で新規就農を受け入れるための自主的組織の記事を見て美深を進められたため、美深を訪問した。最初に紹介された牧場では放牧が出来ない条件だったため、同組織代表に別の所を「渋々」案内してもらったところが現在の牧場で会った。「渋々」の意味は、地域的に山奥で条件も悪いところだから、ということであった。しかし本人は気に入ったため、飛び入りで玄関のドアを開けて経営主に話をして就農意向を伝えた。本来は、他にも何件か紹介してもらおう予定だったが、経営主から離農予定と聞いて就農を決意した。

その後電話で交渉しながら、2003年冬に1度来町して町役場、農協と面接をおこない、それを経て2004年の5月に移住して実習をスタートした。前経営主の離農理由は、体調不

良（腰を痛めていた）であり、市街地に購入した住宅に移住していた。したがって実習当初から、作業は多くの部分を担当していた。2005年には飼養管理、牧草収穫全般行うようになり、2006年の11月にリースで就農している。その意味では、就農まで4年の実習経験と言うことになる。

③放牧技術の特徴と技術採用のプロセス

放牧のスタイルとしては、前経営主のやり方を初年度から変更している。前経営主は放牧地10haほどで昼間のみの放牧を行っていたが、就農した2006年春からは放牧地を30haに拡大し、昼夜放牧を開始し、放牧期間中は粗飼料を一切給与しないというやり方をとっている。また、併給飼料についても前経営主からは変更し、放牧期は配合0~4kg/頭/日、ビートパルプ0~4kg/頭/日とし、2008年には配合を夏の時期にはコーン主体のCPの低いものへと変更、そして2013年から放牧期はビートパルプのみとしている。

その際のモデルとなったのは、唯一の実習経験である三友牧場での経験と、「もっと北の国から」の主催者である石田氏からのアドバイスである。

表20に示したようにリース事業での就農後から、徐々に生産量を減少させているという点の特徴である。通常就農直後は子供も多く家計支出が増加し、さらにはリース料金の支払いもあるため、ある程度の乳量を絞る新規参入者が多い。しかしF氏の場合は、生活に必要な必要最低限の乳量を確保しつつも、自分の目指していた「粗放的酪農」にこだわり、リース期間の終了後からすぐに経産牛頭数を減らしているという点が大きな特徴である。

表20 No.6農家における出荷乳量の推移

年	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013
出荷乳量	260t					170t	160t
乳代		1800万円	1600万円	1500万円	1200万円	1500万円	
経産牛頭数	40頭	40頭	40頭	40頭	40頭	35頭	30頭

聞き取り調査より作成。

④組織への参加状況

○フォーマルな組織

4Hクラブには就農してすぐ参加し、現在もほぼすべて参加している。また、現在は農業委員にもなっており、地域の最年少委員である。さらに2013年からはPTA会長、2007年から山村留学の受入委員をやっている。

○インフォーマルな組織

「もっと北の国から」には、実習期間中から参加しており、現在は不定期での参加である。今年夫婦で一緒に1回参加したのみである。天北放牧ネットのセミナーには就農直後に参加し、メンバーが実施した農水省への訪問などにも同行した。

⑤2013年度の営農上の最も重要な課題とそれへの対応

今年の課題としては、牧草の収穫時期に雨が続き、なかなか収穫が出来なかったという

点である（干ばつの影響についてはあまりなかったと認識している。これは頭数に対して放牧専用が多いためだろう）。地域に乾草を収穫している酪農家はほとんど無いため、収穫のタイミングはラジオで天気予報を聞きながら自分で判断している。しかし今年については、7～8月にかけて乾草を収穫できるような天候が2～3日間しかなく、20ha分しか収穫できなかったという状況であった。

9月に入ってもやっと追加で20haを収穫したが、残りの30haについては収穫できなかったという異常な状態であった。そうした状況であったため、牧草収穫時期について、自分でも不安になることがあったために、同じく新規参入で酪農をされており、酪農に対する価値観が似ていると感じている紋別市の酪農家に電話が確認をしている。わからないので情報収集する、というのではなく、自分の判断の正しさを確認するためである。

⑥経営主が持っているパーソナルネットワーク

パーソナルネットワークは表21のようになっている。日常的な「経営に関する工夫（何をどこで買えばいいのか、どう使えばいいのか、税金対策は）」というようなこと（出来ることが起きたときに確認する）は、No.1に相談をしている。酪農に関することで困ったとき、特に自分のやり方を確かめるという意味ではNo.2に連絡を取る。今年の事例では、先述したように乾草を9月に収穫する際、不安を解消するため、それを確かめるために電話をした。

そして、実習先であったNo.3は現在では「何かの機会であったときに話をする」というつながりとなっている。そして、生活という意味ではNo.4があり、近所なので頻繁にあつて色々な話をして、価値観の共有・刺激をうけている。

また、No.1との関係について変化が見られている。今でも酪農のことについては教えてもらう立場にあるが、それに加えてすでに「新規就農希望者の相談」というように、情報の受け手では無く、新規支援ネットワークの仲間という関係に変化しつつある。

本人は、当初から公的なもの（4Hに参加）しているなど、地域に溶け込む、外に出て行く、ということを実践してきた。一方、妻は就農している地区では山村留学の父兄や移住者などが多く比較的価値観が近いことから密な関係を持っているが、それ以外の町内の人たちについてはあまりつながりがなかった。しかし最近では、隣町の教会活動に参加したことを契機として、地元とも接点が必要で、価値観の違う人についてもそれを認めようという意識に変化している。

また、北海道の農村の特徴と考えられるが、人口の減少している地域において、F氏のよう30才代の前半からPTA役員や農業委員を経験するようになっている。このような「公職」は経営主のネットワークをより広げ、自分の経営以外の地域についても関心を持つようなきっかけとなっているようである。例えば、現在考えているブラウンスイスの赤身肉ドライエイジングなどは農業委員の視察研修がひとつのきっかけとなっている。また、酪農とは直接関係はないが、越冬キャベツの会というような任意の人たち（異業種交流のようなものか）の活動にも関わるようになっている。

就農8年目にして、本人の意向とは関係なく、地域の実情が経営主のネットワークの拡大、質的な転換をもたらしており、それが農業経営にも今後影響を与えるのではないかと考えられる。

表21 No.6農家のパーソナルネットワーク

番号	年齢	関係(知り合った契機)	会話頻度と方法	つながりの内容
1	40才代後半	隣町の酪農家(もっと北の国からの主催者)で実習生時代の研修会で	交流会などのイベントの 때가主	牛の飼い方もあるが、より細かい経営に関する工夫のこと、最近では新規参入希望者のことについて
2	38	L市新規参入酪農家で実習生時代の研修会で	電話や何かの会う機会	酪農に対する価値観が似ているので、悩んだときに相談をする
3	70	実習先の放牧酪農家	何かの会う機会	
4	48	同じ集落の移住者で羊毛作家	集落の集まりなど、頻繁に。	価値観が似ている

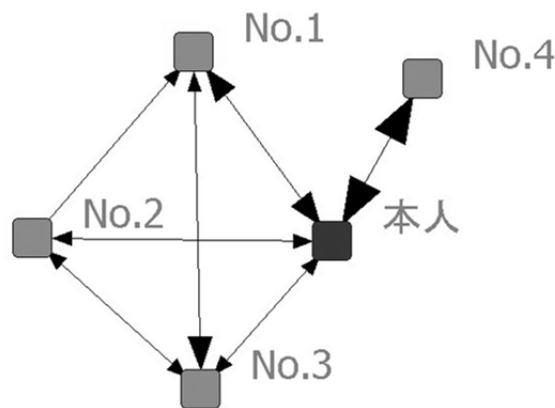


図8 No.6のパーソナルネットワーク

(7) No.7 ～就農10年目のG氏～

①経営概況と地域の特徴(表22)

G氏は、会社勤めを経験した後、全く酪農はおろか農業経験もないままに、北海道への移住を第一の目的として2004年に猿払村に就農している。経営主44才、それに妻と3人の子供がいる家族経営である。経営の考え方としては、経費の削減を第一の目標としており、放牧もそうした考えから季節分娩を狙った飼養管理を行っている。

現在の飼養頭数は経産牛で44頭、育成牛は自家育成が4頭で残りの15頭は村の公共牧場に預託している。経営耕地50haで放牧専用地は15ha、兼用地が7haで残りの28haが採草専用地である。

牧草の収穫作業は隣にいる同時期に新規参入したM氏との共同作業で行っておりM氏は、G氏にとっても重要なネットワークとなっている。

また、G村では新規参入者の支援を行うためのグループが活動しており、最近ではその活動にも積極的に関わるようになってきている。

表22 No.7農家の経営概況

経営面積 (ha)	自作地	50	年間出荷乳量(トン)	2012年	316		
	借地	0		2013年(予測)	316		
	合計	50		一日あたり乳量(kg)	ピーク(6月)	1,200	
土地利用 (ha)	放牧専用地	15	一頭あたり年間乳量	最小(2月中旬)	500		
	兼用地	7		平均乳成分	乳脂肪	3.80%	
	採草地	28			タンパク	3.08~3.12	
飼養頭数	経産牛	44	分娩間隔		416		
	うち搾乳牛	40		初産月例		24	
	育成牛	19		平均産次数		3.4	
牛床		51	飼料給与	舎飼い期	粗飼料 配合 ビートパルプ その他	なし	ロールバック 少量 少量
方式	スタンション			放牧期	粗飼料 配合 ビートパルプ その他	コーン	ロールバック 2~3.5kg 2kg 2kg
放牧時期	5月中旬~10月下旬						
放牧方式	3牧区						
農場購入価格		4,800万円					
農場リース事業の利用有無		有り					
自治体支援・助成		なし					
自己資金							
青年給付金		なし					

②就農までの経過

経営主は法政大学を卒業後、電力会社に就職して営業を行っていた。就職して十年ほどを経過したときに、都会での生活に疲れを感じ、学生時代から旅行などで訪れていた北海道に移住したいという意向を強めた。そして、北海道に移住して生活する手段を考えた際に酪農が思い浮かび、当時実習生を募集していた G 村で研修を開始した。その後地域の酪農ヘルパーとして働いた後に、リース事業にて 2004 年の秋に就農をしている。

③放牧技術の特徴と技術採用のプロセス

放牧のやり方としては、最初のモデルは季節分娩を基本にしたやり方であり、それを現在でも目標としている。基本的には、乳量が低いなかでは、経費を如何に削減するのか、ということに注意を払って経営を行ってきた。

④組織への参加状況

○フォーマルな組織

数年前より、酪農振興会の中の委員である新規就農支援委員となっている。その他、消防隊には 5 年目くらい前から参加し、今年からは PTA 会長となっている。

○インフォーマルな組織

以前は視察研修などにはよく参加していたが、参加率は低下している。研修会なども、「人の話を聞いてもしょうがない」からあまりいかなかったということである。他の人のやり方と自分のやり方は違う。いいなとその時思っても実際に応用できることは少ない。また、経営としてもこれまで順調に経過してきたことから、何かを変えるという必要性がないということも要因としてあげられていた (表 23)。

そうしたなかで、今年是小泉氏 (天北放牧ネットワーク交流会代表) に声をかけられて G

村で開催された新規参入希望者向けのセミナーで自らの経験を発表する機会に参加している。

表23 No.7農家の経営の変化

年度		2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012
経産牛頭数	頭	40-46	45	45	45	45	45	45	45
農業所得(専従者給与差引き前)	千円	-750	4,366	5,000	650		5,800	7,500	8,900
乳代(補給金除く)	千円	14,400	21,100	19,500	21,700	22,700	22,000	22,000	24,000
配合飼料(成牛)	千円	1,500	2,400	2,900	4,000		2,900	4,600	4,800
その他購入資料(成牛)	千円	1,400	2,100	2,400	1,600		2,300	1,400	1,500
リース料金	万円	600万	600万	600万	600万				

資料)聞き取り調査より作成。

⑤2013年度の営農上の最も重要な課題とそれへの対応

2013年度の最も大きな課題は、マニュアルプレッダーの購入であったと認識している。これまでは、飼料添加物なども極力つかないように心がけてきた。コストの低減が一番の理由であり、一頭あたり乳量は低くても経費をかけないことが一番収益性の高いやり方だという考えからである。そうしたなかで、今年は国のリース事業の関係で、マニュアルプレッダーを購入した。就農後初めての新品の買い物であった。今後は機械投資など、どこの部分にお金を使うのか、ということを考えなければならないと考えている。これが就農10年目になって新たな経営上の課題である。

最初、農協からリース事業の話があったときには購入希望は出さなかった。希望者が多いと言うことで、希望者同士での話し合いをすることになったが、その連絡を受けた多くの農家が購入辞退したため、反対に予算が余る事態となった。そこで、農協から何か買ってくれと頼まれたために、マニュアルプレッダーを購入したという経緯である。今後は、こうした機械の更新、施設投資などが必要にはなるが、今年の投資に関しては受動的な対応だったと感じており、今後は能動的に考えざるを得ないだろうと認識している。

また、もう一つの課題として、季節分娩の維持が経常的な課題として上げられた。G氏の経営理念の中心には経費の節減がある。その実現のために季節分娩は重要な技術目標であると認識しているが、1~4月分娩の牛を安定的に確保するという点に常に苦慮している。毎年この時期の分娩は30頭程度であり、のこり15頭は夏~秋にかけての分娩となっている。現在では、全頭を春分娩にすることを目的としてはおらず、これが自分のスタイルと認識している。

⑥経営主が持っているパーソナルネットワーク

パーソナルネットワークは表24のようになっている。最初の重要な人物として家族をあげている。これはもし仮に経営破綻をしたときなど、金銭的に頼ることが出来るのが家族という認識であり、いわばセイフティーネットのようなものである。日常的、現実的には、隣接した新規参入者であるNo.2が中心である。

また最近では新規参入者の受入支援を担うようになったため、No.4とのつながりが強くなっている。つまり、頼るためのネットワークから、地域を支援するためのネットワークが出来つつある。本人としても、それを積極的に受け入れているようである。

ネットワークとしては、最近はあまり積極的な展開は見られないが、最近飛び込みの

業者などからも積極的に情報収集するようになったという。どんな機械がいいのか、飼料メーカーには季節分娩をうまくやるためにはどうすればいいか、ということを引きよようになった。

これまでは、業者からは話を聞いても、「ものを買わされる」ことへの警戒心があった。何か資材などで問題を解決しようとする、また問題が発生したときにそれに頼るようになる。その結果資材への依存を辞められなくなるという話を聞いたことがあったためである。しかし、最近は積極的に情報収集している。それは、自分の経営のスタイルが確立し、経営主として自信がついてきたこと、つまり情報に惑わされなくなったことが原因である。また、現在の経営の課題が明確になっているので、質問内容自体も明確になり、主体的に情報収集が出来るまでになったと言うことを意味しているのであろう。

表24 No.7農家のパーソナルネットワーク

番号	年齢	関係(知り合った契機)	会話頻度と方法	つながりの内容
1		母・兄	減多に連絡はしないが	何かあったときに金銭的にもたすけてくれるのではないかと(そうなる前にやめるとは思うが)
2	40才代	同じ地区の新規参入放牧酪農家	月に1回ぐらいは会って話を する	牧草の共同作業をやっている。機械の貸し借りから、釣りなど。
3	40才代後半	もっと北の国から主催者	減多に連絡は取らないが、何かあったときには相談できるのではないかと。	
4	40才代後半	同町の新規参入放牧酪農家、酪農ヘルパー時代からのつきあい	何かの機会顔で顔を合わせたとき。今年は放牧関係のセミナーで発表したの、その関係で何度か。	新規就農支援員との関係で打ち合わせなど
5		元会社の同僚	連絡は取らないが、何かあったら相談するかもしれない	

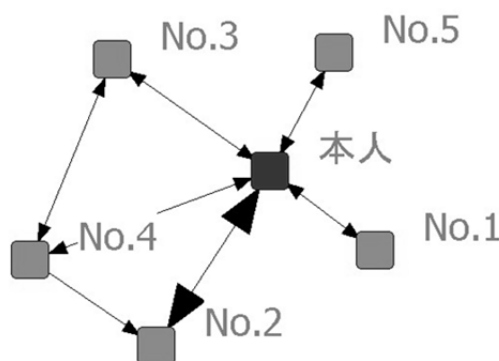


図9 No.7のパーソナルネットワーク

4. 新規参入による放牧酪農家のネットワークの特徴と支援の課題

1) 就農段階および経過によるネットワークの機能の変化

(1) 就農経過年数の浅い段階

これまで見てきた7戸の事例から、それぞれのパーソナルネットワークの特徴について、就農経過年数との関係から整理をしてみよう。

就農を目指した研修期間中から、すでにパーソナルネットワークは形成されており、それが就農後も大きな影響を与えることになる。また、今回注目した「自主的ネットワーク」とのつながりも研修期間中に形成されていた。研修期間中は就農に関して得られる情報は限られている。そうしたなかで、放牧に関する自主的ネットワークへ参加することで、就農地の情報、放牧に関する様々な技術的情報、新規参入した後の生活に関する情報などを得ることが出来る。

また、No.1 農家の場合のように、自治体や農協経由で紹介された就農予定にたいして、いわば第三者意見として自主的ネットワークで知り合った経験豊かな放牧酪農家に牧場を見てもらうことで、就農の決意の後押しになっている場合もある。放牧酪農の場合、通年舎飼い経営よりもより牧場の土地条件などの影響が大きい。こうした第三者意見を得られることは、新規参入直前の段階で重要な意味を持っている。

就農間もない経営主にとって、共通しているのが放牧のみならず酪農に関すること全般について、「頻度高く」、「直接会う」ことや「電話」によってつながるネットワークである。その対象は経営主の就農までの過程に大きく影響を受けている。実習先の農家や同地区にいる放牧酪農家などである。

こうしたネットワークによって情報を得たとしても、今回の事例で夏の干ばつ時期への対処に見られたように、経験の少ない新規参入者にとっては、その後重要な事象につながる兆候に気づくことはむずかしい。粗飼料不足による低酸度乳の発生など、経験を積んだ酪農家であれば、放牧草の状況と牛の採食量を兆候としてとらえ、牛舎内で粗飼料を給与する、という対応をとることが出来る。しかし、新規参入者の場合、実際の事象が現れて初めて対応を考えることになる。

失敗をすることは新規参入者にとっては非常に重要である。全く失敗させないような支援体制をつくることはむずかしい。むしろ失敗をした際に、それをリカバリーするための情報、アドバイスを適切に出来るつながりを持っているかどうか、という点で課題であろう。

また、No.2 農家の事例にあったように、自主的ネットワークが定期的な実施した牧場研修の受入先になった際に、そこに参加していた酪農家からの指摘で問題に気づいたということや、「たまたま」自分の牧場を訪れた放牧酪農家に指摘された、ということで、本人が気づかない問題の兆候を発見・教えられたという事例が見られた。

自主的ネットワークのメンバーは、常に見守ることは出来ないが、新規参入者に対して就農以前からのつながりがあるために、就農後も何かと気に掛けて牧場を訪れるようにしている。何か問題が発生したときに、自ら求めてつながるということとともに、相手先からのつながりがあるということも経験の浅い新規参入者にとっては重要な点である。

○農業経営以外に関するネットワーク

各新規参入者は、酪農に直接関係するつながりに加えて、地域とのつなぎ、生活についても頼りに出来るつながりをもっている。いわば、地域社会へのゲートキーパー（入り口の鍵を握る人物）である。放牧に関する自主的ネットワークの中で得られる技術の情報などは、自分の経営に直接採用できるものではない。そうした際にゲートキーパー、なかでも放牧を実践しているような人物とのつながりは非常に重要となっている。

このことは、新規参入者にとっては酪農経営のスタートとともに新天地での新しい生活のスタートである、ということの意味からも重要である。とくに女性については、積極的に地域の集まりに参加する場合もあるが、新規参入者の場合、既存の酪農家の女性とは異なり都会からの移住者が多いと言うことも関係して、価値観が違い地域に溶け込めないという場合もある。そうした際には、同じ新参入者同士の交流の場である自主的ネットワークがその代わりの役割を果たしている。

また、事例の中ではD町の「J」のように、地域の農業関係者がフォーマルではなく仕事以外の様々な交流を図るための組織があった。こうした組織があることで、地域にある農業関係の既存のネットワークにスムーズにつながる事が出来ている。

(2)「教えてもらう」から、「つなげる」、「発信する」、「刺激を受ける」ネットワークへ

放牧が技術的に確立されるに従って、ネットワークは「情報を得る」ものから、「情報を与える」、または「刺激を受ける」、というように変化している。

参入当初は、実習先の酪農家とのつながりが強いが、ある程度の年数が経つとそれは弱まり、自ら積極的につながるのではなく何かの機会であったときに話をする、という性質のものになる。

一方、新規参入に対する地域的な支援策が充実している地域などでは、すでにいる参入者を辿って新たな参入者が地域に入る、ということがある。事例の中でも自分よりも後に入ってきた新規参入者とのつながりや、既存の農家後継者との自主的ネットワーク組織を形成している事例が見られた。

また、北海道の農村地帯の特徴と考えられるが、農村人口が減少していく中で、新規参入者は集落や地域の様々な「公職」に若い年代でつくようになっていく。30才代前半での農業委員やPTA会長など、自分の経営とは直接関わりのないこのような役に就くことによつて、「刺激」を受けて、それを間接的に自らの経営のつなげるような動きも見られている。

2) ネットワークの特徴

前述したように島(2013)は「橋渡し役農家が提供する支援の重点は、新規参入者の経営ステージによって「スポンサーシップ」や「コーチング」から「役割モデル」や「表出」「挑戦的な仕事の提供」へと変化すること」を指摘している(p152)。今回の調査結果からも、就農後の経過年数との関係で、各個人が持っているネットワークの特徴は、そうした展開論理を指示する内容となった。

一方で、そうした変化は、あるひとつのつながり（島前掲書で言うところの「橋渡し役農家」）が担っていくのではなく、個人が新たなネットワークを動的に変化させながら、その結果として支援の内容が変わっていくと言うことがいえよう。

動的なネットワークの変化、形成は、ひとつには経営主個人の能力やパーソナリティーに求めることも出来る。確かにそうした側面はあるが、それよりも就農に至る過程でどのようなネットワークが形成されたのか、新規参入時にある意味で所与としてその経営主が持ったネットワークが大きな意味を持っているといえよう。

そのいわば初期値としてのネットワークを前提に、それに影響を受けながら経営は展開していくのである。例えば No.5 の事例に見られたように、低投入型の放牧酪農を目指した就農したが、「農協職員」とのネットワークに影響を受けて、高泌乳型の経営として展開していった事例がある。個人のネットワークが、地域のネットワークと交差する過程で、それによる干渉をうけることがあるのである。

3) 自主的ネットワークの意義と支援の課題

(1) 初期ネットワークに影響を与える「就農までのプロセス」

○放牧、酪農に関する研修成果の「パスポート」

研修期間中に、放牧酪農に必要な技術や知識を網羅的に習得することは困難である。また、就農段階で一定の研修内容を共通的に義務づけるようなことも現実的ではない。それよりも、新規参入者が就農に至る過程で、どの程度の知識や技術を習得したのか。また、何かあったときにどういう人に聞くことが出来るつながりを有しているのか。そうした情報を新規受入の際に、受入地域の側が持つことによって、前述した「初期値としてのネットワーク」を把握することが出来る。それにより、その後の支援の内容の設計図を考えることが出来るであろう。

○地域へのゲートキーパーの役割

新規参入者にとっては、酪農経営という視点のみではなく、生活者としての地域とのつながりも非常に重要である。そうした意味では、就農過程では得られない地域とのつながりを就農後につくっていくために、地域と参入者をつなぐゲートキーパーが必要の役割が重要になる。ゲートキーパーは、就農前の実習先が就農地と同じである場合は、実習先の経営主が果たす場合があるが、そうでない場合（居抜きでの継承など、前経営主がリタイヤしている場合）には、それに替わる人物との接点が重要になる。

その人物は個人の場合もあるが、「グループ」によるゲートキーパーの機能を果たすこともある。地域の農業関係者がフォーマルではなくプライベートに交流できる組織があることで、ゲートキーパーの役割を果たしている。さらには、その後の経営展開において地域との調整が円滑に進むということにもつながっている。

ゲートキーパーの役割の重要性を認識し、その人物・組織と新規参入者をつなぐことが支援する側には求められよう。

○新規参入者が見落としがちな「兆候」をみつけるため、経験があり信頼関係のある放牧酪農家による定期的な牧場訪問

新規参入者にとって、メンタリング機能における「スポンサーシップ」や「コーチング」の役割は重要である。多くの場合、新規参入者を受け入れる地域では、支援体制として農協、役場職員が中心となったサポートチームを作り、定期的に牧場の巡回をおこなっている。そうした中で、新規参入者へ日常的に支援を行っているのである。しかし、必ずしもそうした人材が放牧酪農特有の「兆候」を発見できるとは限らず、また適切なアドバイスを行うことは困難である。実際に事例においても、そうした農協職員によるアドバイスの結果として、経営者の考えていた方向とは違う形での問題解決を図ったという事例が見られた。

そうしたなかでは、現在、自主的ネットワークのなかで不定期におこなわれている放牧酪農家によるいわば「巡回」を定期的・システム的に行うことも必要ではないか。現在、日本草地畜産種子協会では、全国 47 牧場を放牧畜産展示・研修牧場として指定している。実際に、今回の事例の中でも新規参入者のパーソナルネットワークのなかであげられた牧場も多くが指定されている。かれらは、自主的な地域の放牧酪農家との勉強会を主催している場合もおおい。

現在はこれら牧場のボランティア、使命感によってそうした活動が維持されているが、こうした活動を地域や行政としてのサポートのあり方についても検討する必要がある。

参考文献

- (1) 柏久『放牧酪農の展開を求めて-乳文化なき日本の酪農論批判-』日本経済評論社、2012年
- (2) 金光淳『社会ネットワーク分析の基礎 社会的関係資本論に向けて』勁草書房、2003年
- (3) 川辺エリック『草地の生態系に基づく放牧と酪農経営—ストックングレートの重要性』デーリィマン社、2011年
- (4) 黒澤不二男編著『北海道農業担い手育成の最前線—熱意と知恵が育てる新農業人』北海道協同組合通信社、2010年
- (5) 小林国之・三谷朋弘「農村におけるネットワークの構造と特質」『2008年度日本農業経済学会論文集』pp.137-144、2008年
- (6) 島義史『新規農業参入者の経営確立と支援方策 —施設野菜作を中心として—』農林統計協会、2013年
- (7) 集約放牧導入マニュアル編集委員会『集約放牧導入マニュアル』独立行政法人農業・食品産業技術総合研究機構北海道農業研究センター、2008年
- (8) 富永健一『社会学講義 人と社会の学』中公新書、中央公論社、1995年
- (9) 中野勉『ソーシャル・ネットワークと組織のダイナミクス 共感のマネジメント』有斐閣、2011年

- (10) 原(福与)珠里「新規参入者のサポートネットワーク」『村落社会研究』8(2)、pp.45-35、2002年
- (11) 澤田守「フランチャイズ型農業における新規参入の特徴と課題」『2011年度日本農業経済学会論文集』、pp.255-261、2009年
- (12) 丸山美貴子「地域酪農の現段階と酪農民の学習運動」『社会教育研究』No.22、北海道大学教育学部、pp.19-35、2004年
- (13) 美土路達雄・山田定市編著『地域農業の発展条件』御茶の水書房、1985年
- (14) 山内庸平・東山寛「組織型リレー経営継承方式による新規参入支援の新展開-北海道美深町を事例として-」『2010年度日本農業経済学会論文集』 pp.105-112、2010年
- (15) 吉野宣彦『家族酪農の経営改善 根室酪農専業地帯における実践から』日本経済評論社、2008年